慈雲と天台僧たち[1]
―『法華陀羅尼略解』の位置づけをめぐって ―

秋　山　　学

序.『法華陀羅尼略解』をめぐる伝承史的状況

筑波大学附属図書館に，慈雲尊者飲光（1718 － 1804）による最晩年の直筆本『法華陀羅尼略解』が所蔵されていることに関して，筆者はすでにいくつかの機会を得て公にしてきた．特に注目すべきは，それまで慈雲最晩年の著作とされていた『理趣経講義』（1803 年 2 月 24 日校了）に対し,『法華陀羅尼略解』には，その奥書に，それよりも 10 日遅い日付（1803 年 3 月 4 日）が入っていることである．これにより，2012 年初夏の段階で，日付の残る慈雲の直筆としては最も遅いものが筑波大学に所蔵されていることになった.

その後の筆者による調査により，三重県津市の天台真盛宗（江戸時代には天台律宗と呼ばれた）・西来寺経蔵中の『法花陀羅尼句解』（以降これを「西来寺本」と称する）が，慈雲による『法華陀羅尼略解』（「筑波大本」とする）の写本であることが判明した（2011 年 7 月 28 日）．眞阿上人宗渕（1786 － 1859；西来寺第 31 世）による西来寺本の奥書には,「右妙法経中陀羅尼句釈者　慈雲尊者飲光比丘所著也．維時天保九年五月廿一日　以松阪来迎寺妙有所持本　令書写畢　竹円房僧都宗淵」[2] とある．2010 年，筑波大所蔵本が慈雲の直筆であることを公にした際には，その筆勢，および奥書の日付と「臘六十四・行年八十六」という記載の関係から慈雲直筆と割り出したのであるが，宗渕によるこの奥書によって,『法華陀羅尼略解』が慈雲の著作であることが，初めて客観的に証明されたことになる．西来寺本の本文の筆跡は，この宗渕の奥書とは別の手になるものであり，また松本俊彰師による『慈雲流　悉曇梵字入門（応用篇）』[3] に収録される来迎寺妙有上人（1781 － 1854）の筆跡とも異なるため,「松阪来迎寺の妙有所持本」を筆写し西来寺本本文を記したのが誰であるのか，現在なお探索中である.

この西来寺本は大量の頭注を含んでいるが,（奥書を除く）西来寺本全体にわたり，その筆跡は（宗淵，妙有とは異なる）同一筆記者（おそらく宗淵の一

弟子か[4]）の手になるものと推定される（梵字部分に関しては，宗渕筆の可能性が残る）．現在の予測としては，西来寺本が大量の欄外注を含めて一様に同一の手になると思われることから，おそらくは，①まず妙有が現筑波大本を書き写し，それに自ら詳細な欄外注を書き加えた．②それを宗渕が借り受け，全体を一人の弟子に筆写させ，これが現在西来寺経蔵に残る，ということになるであろう．

上掲した宗渕の奥書にある「天保九年」とは 1838 年のことであり，宗渕はその前年の 1837 年に，偉業の誉れ高い「山家版法華経」を開版している．したがって宗渕は，この慈雲著『法花陀羅尼句解』より得た知見を，自らの「山家版法華経」校訂に反映させることはなかったものの，その実直な性格から，「山家版」の開版後も法華経本文に関わる先学の著作を収集する方針に変化はなく，親友の妙有より借り受けてこれを筆写させたものであろう．

ところでこの西来寺本には，先の筑波大本に見られた慈雲による奥書が脱落している．筑波大本の最終頁には，

「師子娯楽　已上普賢咒竟　不空本此下有　anuvartta varttine varttāri svāhā 之句　隨転聖説而奉行受持」（梵字部はローマ字化した）

とあり，この後に

「享和癸亥三月四日小子記此略示　但陀羅（尼）甚奥　豈得浩海一滴乎　且録信解之介耳 Kāśyapa 臘六十四　行年八十六」

との奥書が続き，全体が 1 頁のうちに収められている．ところが西来寺本の最終頁には，

「衆（ママ；暁の誤写か）衆生音　siṅha-vikritrite」

という記載が，筑波大本最終頁記載部冒頭（「師子娯楽」）の前に加わっている（すなわち「師子娯楽」は siṅha-vikritrite の『正法華経』における漢訳である）ものの，末尾は「隨転聖説而奉行受持」で終えられており，ここでちょうど余白が尽きることもあったのであろう，次頁に移行し，現存状態では，そこには先の宗渕による「右妙法経中陀羅尼句釈者」以下の奥書が見られるのみである．もっとも筑波大本だけに見られる「享和癸亥三月四日小子記此略示」から「Kāśyapa 臘六十四　行年八十六」までの記載こそ，この著作が慈雲のものであることを不動にしている部分である．おそらく，妙有がこの部分を写し漏らすことはなかったと思われる．そこで，宗渕の写させた筆記者がもしこの部分をも書き取っていたならば，長谷宝秀和上（1869 － 1948）による『慈雲尊者全集』編纂の際にも，写本である西来寺本から『法花陀羅尼句解』が全集に収録された可能

性がある．現在の『慈雲尊者全集』には『法華陀羅尼略解』は収録されておらず，筑波大本に関しての書誌データが，東京師範学校当時から「著者・筆者不明」の状態に留まっていたため，この著作が慈雲の手でなされたということすら公には知られないまま，2010 年を迎えたということになる．つまり，宗渕による西来寺本の「右妙法経中陀羅尼句釈者　慈雲尊者飲光比丘所著也」との記載だけでは, これが慈雲の著作として認定されるには到らなかったのである．筆者が西来寺本の確認のために津を訪れようと思い立ったのも，眞阿宗淵上人鑽仰会編になる好著『天台学僧宗淵の研究』（百華苑刊，1958 年）の巻末年表 295 頁「天保九年」の項の「五月二十一日，松坂来迎寺妙有所持法華陀羅尼句解一巻を写さしむ（同奥）」との記載，あるいは同付録「竹円房蔵書写本現存目録」12 頁の「法花陀羅尼句解」との名を見てのことであり, それらの箇所では, 宗渕の奥書にある「慈雲尊者飲光比丘所著也」には注意が払われていなかったのである．

Ⅰ　『法華陀羅尼略解』と天台僧たち

前節に挙げた『天台学僧宗淵の研究』は，天台真盛宗総本山西教寺第 41 世貫首・眞虔上人（色井秀譲師，1905 － 1990）を初めとする天台真盛宗関係の碩学たちが挙って編んだ名編であり，1958 年，津・西来寺に住持した宗渕上人の 100 回忌を記念して刊行されたものである．このとき，すでに慈雲尊者全集は 1926 年に完結し，その補遺も 1955 年に刊行された後であった．そのいずれにも，筑波大に所蔵される『法華陀羅尼略解』は，西来寺本からの情報も含め，まったくそのデータが届くことなく，収録されずに時が経った．慈雲尊者は，戒律復興運動の流れで「正法律一派」と称されることが多いが，元来は真言律宗（西大寺系）の出身である．したがってこの間の事情としては，もとよりわが国の国立学術教育機関と宗教関係者との交渉のなさに関しては言うまでもないが，おそらく天台宗諸派と真言宗との交流の乏しさ，ないし比叡山と南都諸派の交流のなさに遡る理由を見出せるだろう．色井秀譲師は悉曇学にも造詣が深く，その著書『悉曇覚書』において，かなりの長きにわたって慈雲の業績を紹介しておられるのであるが，もとより慈雲研究者ではないため，正法律全般ないし真言密教への理解には拓かれていなかった模様である．

しかしながら慈雲在世時には，これとはまったく趣を異にする状況が展開していたであろうことは想像に難くない．それは，この『法華陀羅尼略解』の伝

承の経緯そのものが物語っているとおりであり，慈雲の最晩年の著作を，妙有が筆写しているのである．妙有が慈雲門下に入ったのは 1803 年，妙有 23 歳，慈雲 85 歳のときのことであり，同年 10 月に妙有は慈雲より（おそらくは悉曇の）許可灌頂を受けている．『法華陀羅尼略解』の成稿は同年 3 月のことであるから，おそらく慈雲は，自らの門を叩いた若き天台律僧の妙有に，成稿後まもない『法華陀羅尼略解』を見せて写させ，妙有はこれを生涯肌身離さず持して参観し，頻繁に書き込みを行ったものと考えられる．

また妙有に先立ち，慈雲の許にはやはり天台僧（寺門派）の敬光律師（1740 － 1795）が弟子入りして悉曇を修めており，それは敬光が相国寺に寓していた頃，1770 年のことだとされる[5]．慈雲が正式に雙龍庵より京の阿弥陀寺に移ったのは 1771 年であるが，慈雲はそれ以前にもたびたび京に足を運んでおり，その頃に敬光と慈雲との交流が行われたものと推測される．結局，敬光の示寂が慈雲よりも約 10 年早かったこともあり，慈雲の『梵学津梁』雑詮の中には，敬光による『妙法蓮華経梵釈』1 巻が収められている．これは最新の高貴寺 DVD に収められており（0438「妙法蓮華経梵釈」，画面フォルダは 0437 所収の 0191 が該当する），1776 年刊行の版本によるものである．そのほか敬光には『法華梵釈講翼』1 巻もあり，また敬光は，寺門派として派祖･円珍（814 － 891）への崇敬やみがたく，『日本大蔵経』に載る円珍撰『法華経梵釈』を校訂する労をも惜しまなかった[6]．慈雲が最晩年に『法華陀羅尼略解』を成稿する背景に考えられるのは，ひとまずこの敬光による『法華経』関連の梵学関係著作であろう．

妙有から『法華陀羅尼略解』を借り受けていたことが判明した宗渕は，また別のルートで慈雲とつながっていた．それは敬光の弟子・敬長（1779 － 1836）と宗渕が交遊を持っていたことによる[7]．敬長にも『悉曇源鑑』1 巻がある．もっとも宗渕は，何よりも最澄（767 － 822）が伝えた『法華経』の正しい読みを伝承しようと志し，前述のように「山家版法華経」を 1837 年に開版している．上掲の『法花陀羅尼句解』を写させ終えたはその翌年，1838 年 5 月 21 日のことである．

慈雲の『法華陀羅尼略解』の原本・筑波大所蔵本は，おそらく阿弥陀寺が 1874 － 75 年ごろに廃寺とされた際に流出し，東京師範学校（1873 － 1886）が入手したものだと思われるが，2010 年にこれが発見されるまで，西来寺本の奥書に注目されることがなかったために，慈雲がそのような注疏をものしたということすら確認されることのなかった著作である．本稿は，今後の文献学

的探索のための準備作業として，上記のような天台諸僧と慈雲との関係を探り，『法華陀羅尼略解』成立をめぐる諸経緯に光を当てるべく，まず天台および真言，そして慈雲の属した正法律一派の基礎的勤行の次第とその意味を問おうとする試みである．

Ⅱ　四人の天台僧

上に記したように，慈雲には少なくとも，敬光（1740 － 1795）・敬長（1779 － 1836）・妙有（1781 － 1854）・宗淵（1786 － 1859）という 4 人の天台僧侶たちとの直接・間接的な交遊が認められることになる．筆者は比較典礼学の視点から，仏教儀礼の相互比較に挑戦してみたいと考えている．仏教学は，事実上所属寺院とその宗派の許での「宗学」に左右される面が大きいところから，特に真言宗と天台宗との交流を伴う比較儀礼学はこれまで発達する余地がなかった．そもそも，大乗戒を旨とする天台宗と，四分律ないし有部律を捧持する真言宗諸派とでは，交遊の意味がなかったとも言える．まず以下，本稿でとり上げる 4 人の天台僧たちについて，もう一度簡単に振り返っておく．

1．敬光（1740 － 1795）[8]

近江園城寺法明院の学匠．字は顕道，山城北岩倉の人，宇多天皇の後裔であるという．1750 年，11 歳にして園城寺敬雅僧正に師事し，1752 年得度，1770 年京に出て相国寺に寓し，慈雲について悉曇を学び，兼ねて密教灌頂を受ける．1771 年 6 月，播磨西岸寺の請に応じて『観経妙宗鈔』を講じ，冬には洛東源宗院に『摩訶止観』を講ずる．1776 年冬，定玉に従って五部伝法をうけ，1778 年春梵網具足戒を受け，同年冬，戒光山に登って戒灌頂の法をうける．1785 年には和泉鳩原弥勒堂に，1786 年冬には出雲鰐渕寺に転ずる．1788 年春，松府晋門院に掛錫し，1791 年春蓮光寺に遊化し，出雲大社に詣で，円戒の冥助を祈り，1793 年春京都に入る．1794 年園城寺法明院に住し，1795 年病に罹り，同年 8 月寂す．当時比叡山は，『梵網経』に説かれた大乗菩薩戒に加えて，『四分律』による比丘 250 戒を必ず兼学すべきであると唱える「安楽律一派」（妙立慈山（1637 － 1690），霊空光謙（1652 － 1739），玄門（1666 － 1752）らに始まる）が比叡山飯室谷の安楽院に拠って勢力を張っていた．これに対して敬光は，彼らの主張が祖師最澄の趣旨に反すると厳しく批判し，梵網戒による最澄由来の古式の復興に尽力した．著書としては『円戒指掌』『山家正統学則』

のほか,『梵語千字文訳註』『悉曇正音義』『普賢行願讃梵本』『妙法蓮華経梵釈』『悉曇蔵序講翼』『法華梵釈講翼』各 1 巻が知られている [9].

2. 妙有（1781 − 1854）

松坂来迎寺第 27 世，尊者最晩年の弟子であり，また慈雲の主著『十善法語』を 1810 年に初めて開版している．妙有の自筆年譜が残っているため，かなり詳細に生前の活動が判明する．それによると，享和 3 年（1803 年）10 月に慈雲の許に弟子入りしたという．1836 年，全国的な飢饉のため，施粥行に奔走し，これが妙有の名声を高からしめることになる．慈雲門下の法友，智幢法樹（1775 − 1854）より，慈雲の『方服図儀』広本の元本を拝借し筆写している．法樹と同じく 1854 年，来迎寺方丈に示寂（74 歳）．妙有の来迎寺での在住は 38 年間に及んだ [10]．ちなみに宗渕，妙有とならんで「伊勢の三哲」と謳われる人物として，戒称双修の宗学を再興した天台真盛宗木造引接寺の法道（1787 − 1839）がある [11].

3. 宗渕（1786 − 1859）

京都北野天満宮の社僧，光乗坊能桂の子息として 1786 年 10 月 25 日に生誕，1800 年天曜寺昌宗を証明として出家し，1813 年 27 歳で大原普賢院に住し，1818 年 32 歳のとき同院を辞し，坂本の求法寺走井堂に籠ること 10 年，1827 年 42 歳にして，天台真盛宗総本山・比叡東麓の西教寺 26 世貫首真雄僧都の要請により，津の別格寺院西来寺に入りその第 31 世を継ぎ，真阿と称した．これは真阿弥陀仏の略であると同時に，本不生・阿字にも通ずる名である．顕密の天台学はいうまでもなく，声明･書誌学･音韻学等に造詣の深い学僧であった．法華経の正しい本文と読み方を探索し，異本収集の旅は，東は常陸の千妙寺 [12]，西は播磨加古川の鶴林寺にまで及んでいる．1849 年 64 歳にして，西来寺を弟子の真吽観海に託し，以降もっぱら著作と開版に従事した．著作は百余部三百余巻，開版は六十三部百一巻にのぼる．開版された著作には，『山家本法華経』（1835 年），『梵漢両字法華経品題』（1837 年），『阿叉羅帖』（全 5 巻，1837 年），『異訳法華経品題』（1838 年），『梵漢両字法華陀羅尼』（1839 年），『山家本法華経　裏書』（1840 年），『法華経考異』（1840 年），『陀羅尼考異』（1840 年？），『異訳法華陀羅尼』（1840 年？），『宝印集』（全 3 巻，1841 年）などがあり，このほかにも菅原道真関係の考証に名を遺す．竹円房と称したため，その蔵書は竹円房蔵書とされ，大戦時・津の大空襲を辛くも免れて，いまなお西

来寺の経蔵に現存する．1859 年 8 月 27 日，74 歳にして西来寺に示寂している[13]．

『梵漢両字法華経品題』は妙法華の題目と品名とを梵漢両字で対照し，正法華･添品法華および『観智儀軌』（後述）に現れる各品題を列記したものである．また『阿叉羅帖』は，『山家本法華経』とともに真阿僧都が最も心血を注いで開版した労作で，古今の梵字を収集した一大コレクションである[14]．一方『梵漢字法華陀羅尼』は，羅什訳妙法華の陀羅尼を梵漢両字で対照し，これに竺法護訳正法華の訳文，添品法華の漢音訳をつらね，さらに玄洋の伝えた陀羅尼梵文と漢音訳，不空訳の『法華経王瑜伽観智儀軌』の梵文と漢音訳を対照したものである．また『宝印集』は全国著名寺院の梵字や卍字に関係のある宝印を集めたもので，資料探索の旅の副産物である．筑波大学にも版本が所蔵される（ハ 360 － 163，和装古書・三宅文庫）．

このように宗渕は，『法華経』をはじめ，終始一貫して本文の校訂作業に携わる，言わば「テキスト・クリティカー」タイプの学者であったため，慈雲の『法華陀羅尼略解』を妙有より借り受けて筆写させはしているものの，慈雲の句解に関してさらに何かを論ずるといった営為は行っていない．

4. 敬長（1779 － 1836）

出雲の出身で，字は智遠，号は越渓．近代天台宗寺門派の代表的学僧である．上掲の園城寺法明院の敬光に師事し，また宗渕とも親交があったとされる．『日本大蔵経』の「修験道章疏」には，1834 年秋，敬長の撰になる『本山修験勤行要集』二巻が収められている[15]．奥書には「聖護王命予撰輯修験常課之式，校古規恭録法要，後賢冀訂正焉」（聖護王がわたくしに，修験道での常課の式を撰輯するよう命じた．したがって古規を校し，恭しく法要を録した．後の賢者には訂正されたい）と記されている．聖護院は現在の京都市左京区にあり，真言宗系で醍醐寺三宝院に拠る当山派修験道と修験道勢力を二分する，天台宗系本山派修験道の総本山であった．なお修験道は，明治初期の廃仏毀釈時に，戒律宗とともに，もっとも激しく廃仏の対象となった勢力である．敬長の著書には『慈恵大師斎忌礼讃文』『顕道和上行業記』ほかがあり，また悉曇関係の著述としては『悉曇源鑑』1 巻が残る．『本山修験勤行要集』に関しては後ほど検討を加える．

Ⅲ　『成就妙法蓮華経王瑜伽観智儀軌』

さて，慈雲著『法華陀羅尼略解』は，「妙法蓮華経」では巻第八陀羅尼品第二六に収められる五つの陀羅尼、すなわち①薬王菩薩②勇施菩薩③毘沙門天王④持国天⑤十羅刹女による呪，および普賢菩薩勧発品第二八に収められる普賢菩藍による呪を釈したものである．梵字テキストは，弘法大師請来による『成就妙法蓮華経王瑜伽観智儀軌経』，すなわち通称『観智儀軌』の中で，それらの陀羅尼が引かれる部分に基づいているが，不空撰[16]とされるこの『観智儀軌』は，「法華経」を密教の立場から受容する際の根拠として古来珍重され，特に台密の諸家が広く依拠するテキストとなった．

そこでまず，この『成就妙法蓮華経王瑜伽観智儀軌』のテキストを通覧し，その中で上掲した六個の陀羅尼がどのように位置づけられているかを考察することにしよう．以下，『大正大蔵経』所収の no. 1000「成就観智儀軌」のテキストに，三崎良周師の優れた論考「成就妙法蓮華経王瑜伽観智儀軌について」における全体の分割番号【1）－ 53）】と見出しを付す一方，真言部分については，宮坂宥勝師のやはり優れた論考「成就妙法蓮華経王瑜伽観智儀軌にみえる梵文について」[17]で用いられている番号（1. － 40.）を冠することにする．筆者による注記は「～　」の後に挿入する．また三崎分割からは漏れているが適当と思われる段落については○を付す．

A. 前々行

1）「法華経」二十八品大意に関する偈頌（四句一偈）

～大教王は『金剛頂経』であり，成道法は『大日経』に拠るとするこの儀軌が，金胎両部合行の法華法であることを明らかにする部分である[18]．

歸命釋迦牟尼佛　宣説方廣大乘典　為諸菩薩而開示　甚深最勝眞實教[19]
我今依於大教王　遍照如來成道法　若能依此勝義修　現世得成無上覺
歸命縁起初序品　光中能顯因果事　福德智慧至究竟　一乘實相勝義門
歸命善巧方便品　甚深難測如來智　言語道斷離心境　是故方便説三乘
歸命火宅譬喩品　舍利先授菩提記　有情不覺三界苦　佛以三車誘令出
歸命厭悔信解品　於自劣乘而愧恥　深生渴仰難遭遇　我等咸獲無上寶
歸命療疾藥草品　生盲丈夫開慧眼　而獲智光如日輪　於無上乘得善巧
歸命最初授記品　四大聲聞同記別　各隨奉事諸世尊　當來咸證菩提果
歸命化城巧喩品　佛慇懃説昔因縁　爲權止息示化城　至大涅槃爲究竟

歸命五百弟子品　大聲聞僧咸授決　則悟身中如來藏　無價寶珠今覺知
歸命授學無學品　佛記阿難羅睺羅　則表法王無偏黨　漸攝定性及不定
歸命傳經法師品　若有未來諸有情　持此法華一句偈　佛皆與彼而授記
歸命多寶佛塔品　示現淨土集諸佛　提婆達多授佛記　龍女得成無上覺
歸命勸持經典品　姨母耶輸蒙記別　諸大菩薩及聲聞　咸願末法勸持此
歸命修行安樂品　説經先住安樂行　現世獲得殊勝報　於佛菩提不退轉
歸命從地涌出品　八恒菩薩願持經　如來密意而不許　爲顯涌出菩薩故
歸命如來壽量品　佛已成道無邊劫　爲治狂子現涅槃　常住靈山而不滅
歸命分別功德品　無數微塵菩薩衆　聞佛宣説壽無量　各超地位證菩提
歸命隨喜功德品　校量世出世間福　若聞此經一句偈　超彼速證無上道
歸命法師功德品　若能受持此經典　於現父母所生身　獲得神通淨六根
歸命不輕菩薩品　往昔難行苦行業　得聞此經增壽命　度脱無量無邊衆
歸命如來神力品　佛現廣長之舌相　猶豫不信令淨信　見是瑞相獲佛道
歸命最後囑累品　如來付囑諸菩薩　當於未來末法時　流通宣説無吝惜
歸命藥王本事品　爲求法故并三昧　燒身供養淨明佛　難遇經王表殷重
歸命妙音菩薩品　從彼佛刹來此土　而聽妙法蓮華經　既聞本已還本國
歸命觀音普門品　説是菩薩悲解脱　悉皆除遣諸災難　顯現常住如幻定
歸命陀羅尼妙品　二菩薩及二天王　并羅刹女説眞言　爲護持經法師故
歸命妙莊嚴王品　藥王藥上本因緣　由斯二士善知識　而不退失菩提道
歸命普賢勸發品　若有於此蓮華經　於三七日專持習　普賢爲現淨法身

2）四縁具足

～①親近真善知識（灌頂阿闍梨）②聽聞正法（妙法蓮華経王）③如理作意（瑜伽観智）④法随法行（止観）　の四縁を明らかにする部分である．

如方方廣大乘經説．一切衆生身中．皆有佛性．具如來藏．一切衆生無非無上菩提法器．若欲成就如此法者．應當須具如是四縁．一者親近眞善知識．眞善知識者．即是灌頂阿闍梨．二者聽聞正法．聽聞正法者．即妙法蓮華經王．三者如理作意．如理作意者．即爲瑜伽觀智．四者法隨法行．法隨法行者．謂修奢摩他毘鉢舍那．則堪任證無上菩提

3）結界および法華曼荼羅建立

～法華曼荼羅は大悲胎蔵曼荼羅であるが，次の「前行」に見るように第二重院は金剛界三七尊であり，この経法が金胎合糅であることを表す．

若修持妙法蓮華經若男若女．則須依修眞言．行密行菩薩之道．應當先入大悲胎藏大曼荼羅．并見護摩道場．滅除身中業障．

得阿闍梨與其灌頂．即從師受念誦儀軌．三昧耶護身結界迎請供養．乃至觀於已身．等同普賢大菩薩身．若不具如是增上縁者．所有讀誦脩習如此經王．無由速疾證成三昧．一一印契儀軌眞言．應當於灌頂阿闍梨處．躬親禀受．若不從師禀受決擇．而專擅作者．是則名爲越三昧耶．受及授者．俱獲重罪．既得具法．

B. 前行

1）簡択念誦修行処所

即應簡擇念誦修行處所．或於伽藍．或山林樹下江河洲渚．或自己舍宅．與法相應福德之地．

2）掘深二肘

掘深二肘廣四肘量．或六肘八肘乃至十二肘量．稱其處所作曼荼羅．穿其地中．若有瓦礫灰骨蟲炭及諸穢物．即不堪用．更擇勝處穿訖却填．土若有餘是吉祥相．如其欠陷．取河兩岸土填之．若其本淨最爲殊勝．或在樓閣或盤石上船上．佛殿中則不應簡擇．但建四肘曼荼羅．乃至十二肘量如前所説．若廣十二肘高卑可十二指量．於東北隅稍令墊下．是大吉祥．速疾成就．

3）壇既成已

壇既成已．於其中央穿一小坑．安置

五種宝　五薬　五香　五穀　如是五宝香薬等．各取少許．以小瓶子盛．或小瓷合盛之一處．以地天眞言加持一百八遍．眞言曰

1．地天真言　namaḥ samantabuddhānāṃ pṛthivye svāhā.

4）又以仏慈護真言

又以佛慈眞言加持一百八遍．眞言曰

2．如来慈護真言 oṃ buddhamāitrī-vajrarakṣa haṃ.

5）又以無能勝明王真言

又以無能勝明王眞言加持一百八遍．眞言曰

3．無能勝明王真言 namaḥ samantabuddhānām oṃ hulu hulu caṇḍālimātaṅgi svāhā.

6）既加持已

既加持已．安置壇中坑内．填築令平．以隨時香華飲食并二閼伽．以用供養．其修行者面向東方長跪．以右手按於置香藥處．誦告地天偈三遍或七遍偈曰　　汝天親護者　於諸佛導師　修行殊勝行　淨地波羅蜜　如破魔軍衆　釋師子救世　我亦降伏魔　我畫曼荼羅

7）然後

然後取淨土及犢子瞿摩夷未墮地者．與細沙相和爲泥．以塗其壇．待乾已後．又取瞿摩夷和於香水．更遍塗拭．即擣蓮子草揩磨其壇上．正塗拭揩磨之時誦塗地眞言．無限遍數．塗了即止眞言曰

4．塗地真言 namaḥ samantabuddhānām apratisame gaganasame santānugate prakṛtiviśuddhe dharmmadhāto viśodhane svāhā.

○既塗壇已

既塗壇已．如彼壇量．分其聖位各點爲記.

8）用五色線

然後用五色線縒合爲繩．於磨白壇香泥汁中．浸漬一宿然後拼壇.

9）其壇三重

其壇三重．當中内院畫八葉蓮華．於華胎上置窣覩波塔．於其塔中．畫釋迦牟尼如來多寶如來同座而坐.

10）塔門西開

塔門西開．於蓮華八葉上．從東北隅爲首．右旋布列安置八大菩薩．初彌勒菩薩．次文殊師利菩薩．藥王菩薩．妙音菩薩．常精進菩薩．無盡意菩薩．觀世音菩薩．普賢菩薩．於此院四隅角内．初東北隅．置摩訶迦葉．次東南須菩提．西南舍利弗．西北大目揵連.

11）第二重院

次於第二重院．於其東門．置金剛鎖菩薩．南門置金剛鈴菩薩．當塔前門．金剛鉤菩薩．北門金剛索菩薩.

12）於東門北置

於東門北．置得大勢菩薩．門南置寶手菩薩．次於南門東．置寶幢菩薩．門西置星宿王菩薩．次於西門南．置寶月菩薩．門北置滿月菩薩．次於北門西．置勇施菩薩．門東置一切義成就菩薩.

13）又東北隅

又於東北隅角内．置供養華菩薩．東南隅供養燈菩薩．西南隅置供養塗香菩薩．西北隅供養燒香菩薩.

14）次於第三重院

次於第三重院東門．置持國天王．南門置毘樓勒叉天王．西門置毘樓博叉天王．北門置毘沙門天王.

15）於東方門北

於東方門北．置大梵天王．門南置天帝釋．次於南方門東．置大自在天．門西置難陀龍王．次於西方門南．置妙法緊那羅王．門北置樂音乾闥婆王．次於北方門

西．置羅睺阿脩羅王．門東置如意迦樓羅王．

16）於東北方置

於東北方置聖烏芻沙摩金剛．東南方置聖軍吒利金剛．西南方置聖不動尊金剛．西北方置聖降三世金剛．

17）於壇四面

於壇四面畫飲食界道．又畫四門．於其壇上張設天蓋．四面懸旛二十四口．又於四角各竪幢旛．安四賢瓶底不黒者．滿盛香水．於瓶口内雜挿種種時花枝條．於壇四門兩邊．各置二閼伽器．滿盛香水．中著欝金．泛諸時華極令香潔．又於四門置四香鑪．燒五味香．以用供養．又於四隅各置銅燈臺．酥油爲明．於四角外各釘佉陀羅木橛．如無此木鑄銅作橛代之亦得．

18）若修行者

若修行者爲求六根清淨．滿足六千功德．成就法華三昧．現世入初地．決定求證無上菩提者．應一七日三七日乃至七七日或三箇月．應依儀軌隨其力分．

於壇四面．皆置色香美味．種種食飲乳粥酪飯甜脆果子．及諸漿等塗香粖香時華燒香燈燭．所供養物．應以新淨金銀器銅器．及好瓷器．無破缺漏未曾用者．以盛食飲．復用燒香熏其食器．即用聖不動尊眞言．加持三遍或七遍．眞言曰

5．聖不動尊真言 namaḥ samantavajrāṇāṃ caṇḍamahārocaṇasphoṭaya hūṃ traṭ hāṃ māṃ.

～下線を付したように，ここに「法華三昧」の語が見える．この法華三昧と「法華懺法」の関係については後ほど考察する．

○既加持已

既加持已．然後供養．於壇西面應置卑脚床子．可去地半寸已來．以淨茅薦用敷其上

19）是修行者毎日

是修行者毎日四時澡浴四時換衣．如其不及時別澡浴者．即誦清淨眞言加持衣服．此即名爲勝義澡浴．誦三遍或七遍．眞言曰」

6．澡浴真言 oṃ svabhāvaśuddhā sarvadharmmā svabhāvaśuddhā haṃ.

C．本行・胎蔵部

20）即入道場

加持已訖．即入道場．瞻仰尊容如對眞佛．虔恭稽首至心運想．想禮盡虚空遍法界一切諸佛及諸菩薩．

21）誦普賢行願

既禮拜已右膝著地．合掌當心閉目專意．誦普賢行願一遍．一心遍縁諸佛菩薩．應定心思惟普賢行願一一句義．發大歡喜難遭之想．

～この部分に「普賢行願」の語が見える．この「普賢行願」の内実については，次々節で考察する．

22）即跏趺坐

即跏趺坐結定印．誦如來壽量品．或但思惟品中妙義．深信如來常住在世．與無量菩薩縁覺聲聞以爲眷屬．處靈鷲山常説妙法．深信不疑

23）次当即誦無量寿命

次當即誦無量壽命決定如來眞言七遍．作是念言．願一切有情皆獲如來無量壽命．發是願已即誦眞言曰

7．無量寿命決定如来真言

namo aprarimitā yujñānaviniścayarā jendrāya tathāgatāya oṃ sarvasaṃs kārapariśuddhadharmmate mahānayaparivāre svāhā.

24）若修行者

若修行者毎日六時．時別誦此眞言七遍．能延壽命能滅夭壽決定惡業．獲得身心輕安．離諸昏沈及以懈怠．受持此妙法蓮華經速得成就．即用塗香遍塗二手．乃至臂肘．

25）然後・入勝義諦

然後應結一切如來三昧耶印．二手合掌二大指並偃竪．即成．以大指頭拄於心上．入勝義諦實相觀門．所謂毘盧遮那如來心眞言種子阿字．相在己身心蓮華中．其色潔白猶如珂雪．瑩徹光明．漸漸引舒遍一肘量．即思此字眞實義門．阿字者謂一切法本不生故．一切佛法自性本源．清淨法界之所流出一切言教．皆以此字而爲根本．決定專注離於散動．住是觀已即移其印而觸於額．誦眞言一遍．次觸右肩左肩心及於喉．皆誦一遍．運動手印誦眞言時．專注一縁如前觀想．加持已訖頂戴於印．然後解散．眞言曰

8．一切如来三昧耶真言　namaḥ samantabuddhānām asame trisame samaye svāhā.

由結此印及誦眞言．則見一切如來地．超三界道圓滿地波羅蜜

○結法界生

次應結法界生印．二手各作金剛拳．舒二頭指側相拄即成安印於頂．於其印中想法界種子．覧字．其色皓白遍流光明．普照一切有情界．能破一切有情虚妄煩惱．當觀自身及諸有情同一法界無二無別．作是觀已．即誦眞言三遍或七遍．眞言曰

9．法界生真言　namaḥ samantabuddhānāṃ dharmadhātusvabhāvako ’haṃ.

由結此印及誦眞言．則證得無邊清淨法界

〇金剛薩埵

次結金剛薩埵轉法輪印．二手相背右押於左．左右八指互相鉤．苾左大指入於右掌．屈右大指以頭相拄．以印安於心上．又想自心月輪中有吽字．白色清潔．即轉此字爲轉法輪大菩薩身．觀智成已即誦眞言曰

10．金剛薩埵転法輪真言 namaḥ samantavajrāṇām vajrātmako ‘haṃ.

由結此印及誦眞言觀行力故．即能於一切有情界轉大法輪

〇金剛甲冑

次結金剛甲冑印．二手虛心合掌．二頭指各屈．拄中指背上節．二大拇指並竪．押中指中節文．即以印觸額．誦眞言一遍．次右肩左肩心及喉上．各加持一遍．眞言曰

11．金剛甲冑真言 namaḥ samantavajrānāṃ vajrakavaca hūṃ.

由結此印及誦眞言．即是披大誓莊嚴金剛甲冑．光明赫奕．一切天魔及諸作障者不敢凌逼．正結印之時作是思惟．一切有情沈淪生死苦海．我皆拔濟令一一有情與我無異

〇一切如来

次結一切如來大慈印．二手外相叉．二大指二小指各以頭相拄．覆於心上．結印成已．即入一相平等法無我觀．起大慈心遍縁一切有情界．願一一有情皆悉獲得慈心三昧．作是觀已誦眞言曰

12．一切如来大慈真言 namaḥ sarvatathāgatebhyo ye tiṣṭhaṃti daśadiśi oṃ maṇivajre hṛdayavajre mālasainyavidrāpane hana hana vajragarbhe trāsaya trāsaya sarvamalabhavanāni hūṃ hūṃ satvara satvara buddhamaitri sarvatathāgatavajrakal pādhiṣṭhite svāhā.

由結此印及誦眞言入無縁慈觀．能令三千大千世界．下至風輪際．猶如金剛．無量天魔不得傾動．悉皆退散．其修行者若作此法．其道場地即是金剛堅固之城．一切障者不敢觸惱．心所求願速得圓滿

26）方隅界印

次結方隅界印．二手合掌．屈二頭指二無名指．以甲相背．並竪二大指．押二頭指．坼開二小指即成．以印右旋三匝．即成結界．眞言曰

13．方隅界真言 namaḥ samantabuddhānāṃ lelupuri vikuli vikule svāhā.

27）聖不動尊印

次以聖不動尊印眞言．辟除一切諸惡魔障．右手直竪．頭指中指相並．無名小指屈入掌中．以大指捻無名小指甲上．左手亦然．以左手當心爲鞘．右手爲劍置其

鞘中．誦眞言然後如抽劍勢．以印左旋辟除障難．以印右旋隨意遠近結爲其界．結印之時．應觀自身即是此尊．左持金剛羂索．右執金剛智釼．威德光明遍照法界．作是觀已即誦眞言曰

14．聖不動尊真言 namaḥ samantavajrāṇāṃ caṇḍamahārocaṇasphoṭaya hūṃ traṭ hāṃ māṃ.

由結此印及住觀行誦眞言故．能護菩提心．能斷諸見．若修行者常持此眞言．乃至菩提．更不爲諸魔得便．速成正覺

28）次応結宝山印

次應結寶山印誦寶山眞言．二手内相叉．極令深絮（※「口」は「又」）二肘相著開腕即是．眞言曰

15．宝山真言　oṃ acala hūṃ.

由結此印誦眞言加持力故．即此寶山．於其壇中轉成鷲峯山．於山峯上．即當一心專注．觀想釋迦牟尼如來宣説妙法蓮華經處．頗黎爲地．種種妙華遍布其上．寶樹行列開敷寶華．諸枝條上垂妙天衣．微風搖擊出微妙音．其聲諧韻猶如天樂．妙香普熏三千世界．又於中想多寶世尊舍利寶塔．種種莊嚴．釋迦牟尼如來及多寶佛．於其塔中同座而坐．無量菩薩聲聞縁覺天龍八部聖賢衆會．圍遶聽法周圍八方．釋迦牟尼如來諸分身佛．於寶樹下各各坐於衆寶莊嚴師子之座．乃至無量微塵數佛．多寶塔前賢瓶閼伽八功德水悉皆盈滿．妙寶香爐燒無價香．摩尼寶王以爲燈燭．菩提妙華普散諸佛及諸大衆．天諸美膳芬馥香潔．塗香粖香珠鬘瓔珞供養雲海．諸波羅蜜供養菩薩．歌讃如來眞實功德．自見己身於中供獻．於其八方．諸分身佛一一佛前．悉皆如是奉獻供養．又想自身在釋迦牟尼如來前．聽聞宣説妙法蓮華大乘勝義.

29）作是観已

作是觀已即誦此偈曰　以我功德力 如來加持力　及以法界力 普供養而住　誦此偈三遍或七遍.

30）大虚空蔵

即誦大虚空藏普供養眞言曰

16．大虚空蔵普供養真言　oṃ gagano sambhavavajra hoḥ.

由誦此偈及此眞言．於一切如來并大會衆．皆獲眞實廣大供養

次應觀三重曼荼羅會衆．初中央佛并八大菩薩及四大聲聞僧．第二院諸菩薩無量無數．第三院諸天八部并四大威德菩薩．各於四隅．并無量忿怒眷屬．令一切諸魔退散無得侵擾

31）纔発意転法輪

然後結纔發意轉法輪菩薩印．二手各作金剛拳．二頭指二小指互相鉤．即成．以印按於壇上．誦眞言五遍眞言曰

17．纔発意転法輪菩薩真言 oṃ vajracakra hūṃ jaḥ hūṃ vaṃ hoḥ.

由結此印誦眞言故．其壇中諸佛菩薩及諸聖衆．量同虛空遍周法界成報土佛刹．一切有情．冥然身心通同一相．影現於此勝妙刹中

32）真如法性道場観行

則次應入眞如法性道場觀行．而誦此偈思惟偈中眞實勝義．乃至心與眞如體性相應爲限偈曰　虛空爲道場 菩提虛空相　亦無等覺者 眞如故如來

33）奉請一切如来

次結奉請一切如來并諸聖衆印．二手内相叉合爲拳．舒右手頭指．屈其上節如鉤．即成眞言曰

18．一切如来并諸聖衆真言 namaḥ samantabuddhānām aḥ sarvatrāpratihatatathāgatākuśa bodhicarya paripūraka svāhā.

由結此契及誦眞言．諸佛菩薩并其眷屬．無不來集．行者了了分明見在鷲峯山頂空中而住．

34）即取右辺閼伽器

即取右邊閼伽器．二手捧持當額奉獻．想浴諸佛菩薩及諸聖衆足．即於爾時虔恭殷重啓告諸佛求心中所願願速成就眞言曰

19．所願速成真言　namaḥ samantabuddhānāṃ gagana samāsama svāhā.

由獻閼伽香水供養故．令修行者三業清淨．洗除一切煩惱罪垢

○献花座

次應結獻華座印．二手左右大小指各頭相拄．餘六指如欲敷蓮華形即成眞言曰

20．献花座真言 namaḥ samantabuddhānām āḥ.

眞言加持力故．即從此印流出無量寶師子座并蓮華座種種諸座．佛及菩薩一切聖衆．各隨所宜．悉皆獲得殊勝之座

～以下，『妙法蓮華経』陀羅尼品第二六中の五陀羅尼、すなわち①薬王菩薩②勇施菩薩③毘沙門天王④持国天⑤十羅刹女による呪が挙がる．

35）薬王菩薩等諸真言

次結普通印二手内相叉爲拳．諸指節令稍起．即誦藥王菩薩等諸眞言曰

21．薬王菩薩諸真言 tadyathā anye manye manye mamanye cinte carite śame śamitā viśānte mukte muktatame same aviṣame samasame jāṃye kṣaye akṣaye akṣīni śānte śamidhāraṇi ālokabhāse pratyavekṣaṇi hihiru abhyantaraniviṣṭe

atyantapariśuddho ukkule mukkule araḍe paraḍe śukākṣī asamasame buddhavilokite dharmaparīkṣite saṃghani ghoṣaṇī bhayābhayaviśodhanī maṃtre mantrā kṣayate urte rutakośalye akṣaye akṣayavanatāya valo amanyanatāya svāhā.

○勇施菩薩陀羅尼

勇施菩薩陀羅尼曰

22.　勇施菩薩陀羅尼 tadyathā jvale mahājvale ukke mukke aḍe aḍāvati nṛtye nṛtyavartti iṭṭini viṭṭini ciṭṭini nṛiṭṭini nṛiṭṭāvati svāhā.

○毘沙門陀羅尼

訶毘沙門陀羅尼曰

23.　毘沙門陀羅尼 tadyathā aṭye naṭye ‘nunaṭye anaḍo nāḍi kunāḍi svāhā.

○曩国天王陀羅尼

曩國天王陀羅尼曰

24.　持国天王陀羅尼 tadyathā agaṇe gaṇe gauri gāndhāri caṇḍāli mātaṃgi pukkasi saṃkule vrūṣale svāhā.

○十羅刹女陀羅尼

十羅刹女陀羅尼曰

25.　十羅刹女陀羅尼

tadyathā itime itime itime itime itime nime nime nime nime nime ruhe ruhe ruhe ruhe ruhe stahe stahe stahe stahe stahe svāhā.

由誦如上諸眞言故．於持經者作大加持．諸惡鬼神悉皆遠離不敢附近．行住坐臥乃至夢中亦不敢觸惱．一切時中皆得安樂．應作是思惟．於此妙法蓮華經王．起殷重心難遭之想

○復作念言．我從無始生死．輪迴六趣．皆由虛妄顛倒分別．不得早遇如是教王菩薩道法．今既得聞得見受持讀誦．皆是諸佛菩薩慈悲愍念．令我値遇如此妙法經王．如是深恩將何以報．設使三千世界滿中．勝妙一切珍寶并及飲食香華．幡蓋國城妻子如微塵數．乃至身命亦復如是．悉皆捨施．供養如來及此妙法蓮華大乘寶法．雖經多劫．亦未能報一偈之恩．深生慚愧

○復作念言．如我所聞．遍照如來爲諸菩薩．宣説眞言祕密法之供養．於諸世間諸供養中．以法供養爲最爲勝．今我爲報諸佛深恩．依眞言行菩薩方便儀軌．用普供養盡虛空遍法界一切諸佛及大菩薩．作是念已．

～以下「五供養」に移る．五供養とは，塗香，花鬘，焼香，飲食，燈明の5種を言う．

36）塗香印

即結塗香印．先舒右手竪掌向外．以左手握右手腕．作塗香勢即成．眞言曰

26．塗香真言 namaḥ samantabuddhānāṃ viśuddhagandhodbhavāya svāhā.

當運手印誦眞言時．想從印及眞言不思議加持願力法中．流出無量無邊塗香雲海．遍塗諸佛菩薩一切聖衆淨妙色身及其刹土．由作此法．獲得現當來世戒定慧解脱解脱知見五無漏蘊法身之香．若或違犯聲聞乘中律儀戒品．或違犯菩薩道中清淨律儀．纔結此印誦眞言一遍．一切戒品悉皆清淨如故．不墮惡趣疾證三昧

○花供養印

次結華供養印．二手内相叉．二頭指相拄令圓．二大指各捻頭指根下．餘六指入於掌中．令如華形即是．眞言曰

27．花供養真言 namaḥ samantabuddhānāṃ mahāmaitryabhyudgate svāhā.

正結印誦眞言時．運想諦觀．於印眞言不思議願力加持法中．流出無量無邊天妙華雲海．供養一切諸佛菩薩及諸聖衆．由結此印及誦眞言．能令開敷自心蓮華．六根清淨．獲得相好端嚴人所樂見．於一切煩惱及隨煩惱．不被染汚身心寂靜

○焼香供養印

次結焼香供養印．二手中指已下三指．竪相背．二頭指側相拄．二大指各捻頭指根下．即成．眞言曰

28．焼香供養真言 namaḥ samantabuddhānāṃ dharmadhātvanugate svāhā.

正結此印誦眞言時．運心觀想．從印眞言不思議願力加持法中．流出無量無邊焼香雲海．普熏一切佛及菩薩并諸聖衆．由結此印并誦眞言．獲得般若波羅蜜．能斷一切惡見并諸結使．疾證無上正等菩提

○飲食供養印

次結飲食供養印．二手虚心合掌．開掌猶如器形即是眞言曰

29．飲食供養真言 namaḥ samantabuddhānām arara karara baliṃ dadāmi baliṃ dade mahāmaitryabaliḥ svāhā.

正結此印誦眞言時．至誠運想．從印眞言不思議願力加持法中．流出無量無邊天妙香潔飲食雲海．於一一佛菩薩諸聖衆前．以七寶器盛羅列奉獻．由結此印及誦眞言運心供養．獲得法喜食禪悦食解脱勝味食

○供養燈明印

次結供養燈明印．右手爲拳．直竪中指即成眞言曰

30．供養燈明真言 namaḥ samantabuddhānāṃ tathāgatārcisphuraṇāvabhāsanagaganaudārya svāhā.

正結此印誦眞言時．運心諦想．諸佛菩薩從印眞言不思議願力加持法中．流出無

量無邊如衆寶王及日月光明燈燭雲海．照耀諸佛及諸菩薩一切大會．由結此印及誦眞言．獲得三種意生之身．能滅無明住地煩惱是修行者作是供養已

D．本行・金剛界部

37）入実相

次則入實相三摩地．觀一切法如幻因緣和合生故．知一切有情無所得以爲方便．觀一切法如陽焰．上至淨妙佛刹．下至雜染世界．亦無所得以爲方便．觀一切法如夢．於世間受用．知樂受苦受皆無所得以爲方便．觀一切法如影像．知自他身業無所得以爲方便．觀一切法如響應．知一切自他語言．上至諸佛下至諸有情類語業．無所得以爲方便．觀一切法如光影．於自他心知心心所法不即不離．悉無所得以爲方便．即證眞如．觀一切法如水月．初地乃至法雲地菩薩．觀心如水．觀清淨菩提心三摩地如月．心之與月無二無別．亦無所得以爲方便．即證眞如．觀一切法如佛變化．知心心所緣慮．無所得以爲方便．則入大空三摩地．眞如法界遍周佛界有情界．無間無斷遠離言說．及離能緣所緣．若約眞證之門．唯自覺聖智境界所得

38）三摩地印

次即應結三摩地印．二手金剛縛仰於加趺上．以二頭指屈中節．相拄甲相背．以二大指．頭相拄於頭指甲上．置於臍下．閉目澄心．誦通達無礙心眞言七遍曰

31．三摩地真言　oṃ cintaprativedaṃ karomi.

誦眞言已則靜慮專注．尋求自心．今我此心．爲青爲黄爲赤爲白．爲方爲圓爲長爲短．爲是過去爲是未來．爲復現在．良久推求始知此心了不可得．則能通達空觀．我法二執亦不可得．則能悟入人空智法空智．則於此無所得心．觀於圓明．淨無塵翳如秋滿月．炳現於身仰於心上．此則是本源清淨大圓鏡智．

39）誦真言已

作是觀已則誦菩提心眞言七遍眞言曰

32．菩提真言 oṃ bodhicittam utpādayāmi.

誦眞言已．當於圓明滿月面上．觀五鈷金剛智杵．漸引遍舒普周法界．以淨光明照燭一切有情界．客塵煩惱自他清淨．平等平等同一體性．

作是觀已即誦眞言曰

33．菩提真言 oṃ tiṣṭha vajra.

○良久諦観

良久諦觀．復漸收斂其金剛杵．大如己身量誦眞言曰

34．金剛薩埵真言　oṃ vajrātmako ‘haṃ.

40）復観此金剛杵

復觀此金剛杵轉成普賢大菩薩身．光明皎潔猶如月殿．戴五佛冠天衣瓔珞．而自莊嚴．身背月輪．白蓮華王以爲其座．右手持菩提心五鈷金剛杵．按於心上．右手持般若波羅蜜金剛鈴．用按於胯．一切相好悉令具足．作是觀已復自思惟．一切有情如來藏性．普賢菩薩身遍一切故．我與普賢及諸有情無二無別．審諦觀已誦眞言七遍眞言曰

35．金剛薩埵真言 oṃ samantabhadro ‘haṃ.

41）誦真言已

誦眞言已．則結普賢菩薩三昧耶印．二手外相叉合爲拳．合竪二中指即成．以印印心誦一遍．次安於額次及喉頂各誦一遍眞言曰

36．普賢菩薩三昧耶真言 samayasatvaṃ.

42）次応結五仏冠印

次應結五佛冠印．二手金剛縛．竪二中指屈上節．以頭相拄．二頭指各捻中指上節．以印置於頂上．誦眞言一遍．次安額上髮際誦一遍．次移頂右頂後頂左．各誦一遍眞言曰

37．五仏冠真言 oṃ sarvatathāgataratnavireka āḥ.

43）次結宝鬢印

次結寶鬘印．二手各作金剛拳．額上互相縈遶．如繫鬘勢．即分拳於腦後．亦如繫帶．其二手各從小指徐徐散下．旋拳如舞．當繫之時隨誦眞言曰

38．宝鬢真言 oṃ vajramālābhiṣiñcakā vaṃ.

44）結金剛甲冑印

次結金剛甲冑印．二手金剛拳正當於心．各舒頭指互相縈遶．口稱唵砧二字眞言．次移背上亦相縈遶．却至當臍次右膝左膝次臍次腰後次心右肩左肩喉及項後．皆相縈遶．次至額上及以腦後．皆如繫鬘帶勢．二手兩邊徐徐散下．便拍掌三遍．名歡悅一切聖衆．而誦眞言三遍眞言曰

39．歓悦一切聖衆真言 oṃ vajra tala tuṣya hoḥ.

～以下『妙法蓮華経』普賢菩薩勧発品第二八に収められる普賢菩薩による呪が挙がる．

45）修行者，既成普賢菩薩大印身已

修行者既成普賢菩薩大印身已．又結普賢菩薩三摩地印．應修普賢行願．入文殊師利菩薩般若波羅蜜三解脱門．所謂入空三摩地．運心遍周法界．豁然無有一法可得．於須臾頃澄心靜慮．住此觀門．由入此三摩地滅除一切見．爲除空執則入

無相三摩地．於須臾頃住此觀門．由入此三摩地滅於空相．則入無願三摩地．於眞如智本無願求．須臾之間住此觀已．則於自身中當心臆間．觀其圓明可一肘量．猶如秋月光明澄淨．印在心中．則誦普賢菩薩陀羅尼眞言曰

40．普賢菩薩陀羅尼 tadyathā adaṇḍe daṇḍa pativartte daṇḍā vartte daṇḍā varttane daṇḍa kuśale daṇḍa sudhari sudhāra patibuddha paśyane sarvadhāraṇi āvartani sarvabhāṣāvarttani su-āvarttani saṃgha parīkṣite saṃgha nirghoṣane saddharma suparīkṣite asaṃghe saṃghāpagate tri-atve saṃghatulya pramūrte sarvasaṃgha samātikratte sarvadharmma suparīkṣite sarvasatvaruta kauśalyānugate saṃha vikrīḍite anuvartte varttini varttāli svāhā.

46）即以此陀羅尼文字

即以此陀羅尼文字．右旋布列於心月輪面上．觀一一字皆如金色．一一字中流出光明．遍照無量無邊一切世界．良久用心．心不散動則於一一字．思惟實相義門．又一一字中皆有阿字義門．詮一切法本不生不滅不有不無不即不異不增不減非淨非不淨．若能悟此實相緣生法門．則能證得無量無邊三摩地．無量無邊般若波羅蜜

47）次応専注観

次應專注觀．於舌端有八葉蓮華．華上有佛．結加趺坐猶如在定．想妙法蓮華經一一文字．從佛口出皆作金色．具有光明遍列虛空．想一一字皆變爲佛身．遍滿虛空圍遶持經者．其持經者隨其力分．或誦一品或全一部．不緩不急．作是觀時漸覺身心輕安調暢．若能久長作是觀行．則於定中．了了得見一切如來説甚深法．聞已思惟

48）即入法身真如観

則入法身眞如觀．一緣一相平等猶如虛空．若能專注無間修習．現生則入初地．頓集一大阿僧祇劫福智資糧．由衆多如來所加持故．乃至十地等覺妙覺具薩婆若．自他平等．與一切如來法身共同．常以無緣大悲．利樂無邊有情．作大佛事．若念誦觀智已畢」

49）則結普賢菩薩三昧耶印

則結普賢菩薩三昧耶印．誦眞言七遍或三遍．

50）次結五種供養印

則次結五種供養印．各誦眞言三遍．供養諸佛聖衆．則取左邊閼伽．捧當額奉獻．祈心中所求廣大成佛之願

51）次結聖不動尊印

次結聖不動尊印．左轉解界．則入無緣大悲．自他平等喩若虛空．則入法身觀．

無形無色於名於義無所戯論

52）結三昧耶印

則結三昧耶印．置於頂上誦眞言一遍．奉送聖會．

53）雖約真言門

雖約眞言門儀軌奉送．常恒思惟．一切聖衆同一法界．無來無去願力成就當在靈鷲山中．則起遍禮一切諸佛菩薩．右膝著地誦普賢行願一遍．則起旋遶窣堵波．或經行．於四威儀心住阿字觀門．入勝義實相般若波羅蜜門．念念遍縁一切有情．三界六趣四生．願獲得妙法蓮華經王．於聞思惟修習速證無上正等菩提．

以上『観智儀軌』にあっては，本行の前半部（C）が胎蔵法に相当し，同後半部（D）が金剛界法に相当する．前半の胎蔵部行法の部分が量的に上回っているのは確かであるものの，胎金両部の合糅法であるという点は動かず，前半胎蔵法に五陀羅尼が，そして後半金剛界法に普賢菩薩陀羅尼が配されている．梵本の伝存等より考えても，慈雲が『法華陀羅尼略解』を撰するに際して，この『観智儀軌』の次第を意識していたであろうことは想像するに難くない．

Ⅳ　「法華三昧」と「法華懺法」

さて，前節にその全容を提示した『観智儀軌』にあって注目されるのは，B「前行」の中に「法華三昧」の語が現れる一方，C「本行・胎蔵部」の早い段階に「誦普賢行願」という句が現れる点である．『観智儀軌』については「天台法華三昧の勧修方便・修行差定次第と相似し，明らかに天台法華三昧行法の密教化をねらいとする」[20] とされている．この「法華三昧懺法」とは，天台智顗（538－597）の理解では，四種三昧（常坐三昧，常行三昧，半行半坐三昧，非行非坐三昧）のうち半行半坐三昧に位置づけられるもので．それが「法華三昧」の名で伝わり，その通称が「法華懺法」とされわが国の天台宗の朝課として広く普及した．そこで，『観智儀軌』B「前行」の中で言及されている「法華三昧」の構造についてまず瞥見したのち，その普及版と言いうる現今の「法華懺法」について見ることにしよう．

まず天台系・法華経の瑜伽行法である「法華三昧」の概要・骨格を記すなら，次のようになろう．

1. 勧修法
2. 行法前方便

3. 正入道場一心精進方法
4. 正修行方法；

～ここに「法華懺法」に組み込まれる部分が含まれる．「法華懺法」の該当箇所については，多田孝正師の研究[21]に基づき，右欄に附記する．

第 1　厳浄道場
第 2　浄身
第 3　三業供養　（三礼，供養文）
第 4　奉請三宝（奉請段）（法則・咒願）
第 5　讃歎　（讃仏段）
第 6　礼仏　（敬礼段）
第 7　懺悔　（六根段・四悔）
第 8　行道　【半行】（十方念仏）
第 9　誦経　『法華経』如来寿量品（第十六）
第 10　坐禅正観　【半坐】（後唄）

5. 証相　　三礼・七仏通戒偈・六時無常偈・九條錫杖・廻向伽陀

以上から推察するに，確かに「法華懺法」は，「法華三昧」の中からその主要部「正修行方法」を編み出したものである．その際,「法華懺法」において「眼･耳･鼻･舌･身･意」の清浄を期す「六根段」，および「勧請　随喜　廻向　発願」より成る「四悔」は，「法華三昧」の第 7「懺悔」部に配されたものであるという点に注目しておきたい．

では次に，現在天台宗の朝課で広く行われている「法華懺法」の次第を記すことにしよう．これに，晩課で執り行われる「例時作法」の次第をも附記しておく．これらは朝夕の勤行の次第であるため，厳密に言えば，上掲した特別な経法である『観智儀軌』とは次元が異なる．しかしながら今見たように,「法華懺法」の中心には「懺悔」が位置する一方,『観智儀軌』もその前行に「法華懺法」の原型たる「法華三昧」を配していた．「懺悔」という要素はおそらく，大乗菩薩が行うあらゆる行の基本にあり常に重んぜられねばならないであろうから，特別な経法と日常の勤行との対比にも意味があるものと考える．

法華懺法：

総礼伽陀　総礼三宝　供養文　法則　歎仏咒願　敬礼段　六根段　四悔　十

方念仏　経段【安楽行品】　十方念仏　後唄　三礼　七仏通戒偈　六時偈【後夜偈　晨朝偈　日中偈　黄昏偈　初夜偈　半夜偈】　神分霊分祈願　九條錫杖　回向伽陀

～一方，夕課として広く執り行われる「例時作法」は，『阿弥陀経』の読誦を骨子とする次第である．

例示作法：

衆罪伽陀　三自帰　七仏通戒偈　黄昏偈　無常偈　六為　法則　四奉請　甲念仏　経段【阿弥陀経】　甲念仏　合殺　回向　後唄　三礼　七仏通戒偈　初夜偈　九声念仏　神分・霊分　大懺悔　五念門　回向伽陀

この「法華懺法」では，先の「法華三昧」の中で「懺悔」の内容とされていた「六根段」と「四悔」とが，確かに，頂点となる「経段」の前に執り行うべきものとされている．先の「法華三昧」では読誦される経段が「如来寿量品」であったが，それすらも，身の清浄を保つ教えを根幹とする「安楽行品」に置き換えられている．では以下，朝課である「法華懺法」の次第全文を記すことにしよう．○を付したのは『台宗課誦』[22]に見られる小見出しである．

○総礼伽陀　　～伽陀とは gāthā の音写語であり，四言・五言等に句を結び四句を一頌とする韻文を意味する．

我此道場如帝珠　　十方三寶影現中　　我身影現三寶前　　頭面攝足歸命禮

○総礼三宝

一心敬禮十方一切常住佛　一心敬禮十方一切常住法　一心敬禮十方一切常住僧

○供養文

是諸衆等　人各湖（※さんずいではなくあしへん）跪　嚴持香華如法供　養願此香華雲　遍滿十方界　供養一切佛　經法並菩薩

聲聞縁覺衆　及一切天仙　受此香華雲以爲光明臺廣於無邊界　受用作佛事　供養已禮三寶

○法則

○歎仏咒願

○敬礼段

一心敬禮本師釋迦牟尼佛　一心敬禮過去多寶佛　一心敬禮十方分身釋迦牟尼佛　一心敬禮東方善德佛盡東方法界一切諸佛　一心敬禮東南方無憂德佛盡東南

方法界一切諸佛　一心敬禮南方栴檀德佛盡南方法界一切諸佛　一心敬禮西南方寶施佛盡西南方法界一切諸佛　一心敬禮西方無量明佛盡西方法界一切諸佛　一心敬禮西北方華德佛盡西北方法界一切諸佛　一心敬禮北方相德佛盡北方法界一切諸佛　一心敬禮東北方三乘行佛盡東北方法界一切諸佛　一心敬禮上方廣衆德佛盡上方法界一切諸佛　一心敬禮下方明德佛盡下方法界一切諸佛　一心敬禮往古來今三世諸佛七佛世尊賢劫千佛　一心敬禮法華經中過去二萬億日月燈明佛大通智勝佛十六王子佛等一切過去諸佛　一心敬禮過去二萬億威音王佛二千億雲自在燈王佛　一心敬禮過去日月淨明德佛雲雷音宿王華智佛等一切諸佛　一心敬禮法華經中現在淨華宿王智佛寶威上王佛等一切現在諸佛　一心敬禮法華經中未來華光佛具足千萬光相莊嚴佛等一切未來諸佛　一心敬禮十方世界舍利尊像支提妙塔多寶如來全身寶塔　一心敬禮大乘妙法蓮華經十方一切尊經十二部經眞淨法寶　一心敬禮文殊師利菩薩彌勒菩薩摩訶薩　一心敬禮藥王菩薩藥上菩薩摩訶薩　一心敬禮觀世音菩薩無盡意菩薩摩訶薩　一心敬禮妙音菩薩華德菩薩摩訶薩　一心敬禮常精進菩薩得大勢菩薩摩訶薩　一心敬禮大樂説菩薩智積菩薩摩訶薩　一心敬禮宿王華菩薩持地菩薩勇施菩薩摩 訶薩　一心敬禮法華經中下方上行等無量無邊阿僧祇菩薩摩訶薩　一心敬禮法華經中舍利弗等一切諸大聲聞衆 一心敬禮十方一切諸尊大權菩薩聲聞縁覺得道賢聖僧　一心敬禮法華經中一切聖凡衆　一心敬禮普賢菩薩摩訶薩　爲法界衆生断除三障帰命礼懺悔

〇次六根段

至心懺悔．弟子某甲与一切法界衆生．従無量世来．眼根因縁．貪著諸色．以著色故貪愛諸塵．以愛塵故．受女人身．世世生処．惑著諸色．色壊我眼．為恩愛奴．故色使．使我経歴三界．為此幣使．盲無所見眼．根不善．傷害我多．十方諸仏．常住不滅．我濁悪眼．障故不見．今誦大乘．方等経典．帰向普賢菩薩．一切世尊．焼香散華．説眼過罪．発露懺悔．不敢覆蔵．諸仏菩薩．恵明法水．願以洗除．以是因縁．令我与法界衆生．眼根一切重罪．畢竟清浄懺悔已礼三宝．第二第三亦如是

至心懺悔．弟子某甲与一切法界衆生．従多劫來･耳根因縁･隨逐外聲･聞妙音時･心生惑著･聞悪聲時･起百八種･煩悩賊害･如此悪耳･報得悪事･恒聞悪聲･生諸攀縁･顚倒聽故･當墮悪道･邊地邪見･不聞正法･處處惑著･無暫停時･坐此竅聲･勞我神識･墜墮三途･十方諸佛･常在説法･我濁悪耳･障故不聞･今始覺悟･誦持大乘･功徳藏海･歸向普賢菩薩･一切世尊･燒香散華･説耳過罪･發露懺悔･不敢覆藏･以是因縁･令我與法界衆生･耳根所起･一切重罪畢竟･清淨懺悔･已禮三寶　第二第三亦如是

至心懺悔．弟子某甲与一切法界衆生．從無量劫来．坐此鼻根·聞諸香氣·若男若女身香·餚饌之香·及種種香·迷惑不了·動諸結使·諸煩惱賊·臥者皆起·無量罪業·因此増長·以貪香故·分別諸識·處處染著·墮落生死·受衆惡報·十方諸佛·功德妙香·充滿法界·我濁惡鼻·障故不聞·今誦大乘·清淨妙典·歸向普賢菩薩·一切世尊·燒香散華·説鼻過罪·不敢覆藏·以是因縁·令我與法界衆生·鼻根重罪畢竟·清淨懺悔已禮三寶　第二第三亦如是.

至心懺悔．弟子某甲与一切法界衆生．從無量劫来．舌根所作·不善惡業·貪諸美味·損害衆生·破諸禁戒·開放逸門·無量罪業·從舌根生·又以舌根·起口罪過·妄言綺語·惡口兩舌·誹謗三寶·讃嘆邪見·説無益語·鬪構壞亂·法説非法·諸惡業刺·從舌根出·斷正法輪·從舌根起·如是惡舌·斷功德種·於非義中·多端強説·讃歎邪見·如火益薪·舌根罪過·無量無邊·以是因縁·當墮惡道·百劫千劫·永無出期·諸佛法味·彌滿法界·舌根罪故·不能了別·今誦大乘·諸佛祕藏·歸向普賢菩薩·一切尊·燒香散華·説舌過罪·不敢覆藏·以是因縁·令我與·法界衆生·舌根重罪畢竟·清淨懺悔·已禮三寶　第二第三亦如是.

至心懺悔．弟子某甲与一切法界衆生．從多劫来．身根不善·貪著諸觸·所謂男女·身分柔軟·細滑如是等·種種諸觸·顚倒不了·煩惱熾然·造作身業·起三不善·謂殺盗婬·與諸衆生·作大怨結·造逆毀禁·乃至焚燒塔寺·用三寶物·無有羞恥如是等罪·無量無邊·從身業生·説不可盡·罪垢因縁·未來世中·當墮地獄·猛火炎熾焚·燒我身·無量億劫·受大苦惱·十方諸佛·常放淨光·照觸一切·我身罪重障故不覺但知貪著·麁弊惡觸·現受衆苦·後受地獄·餓鬼畜生等苦·如是等種種衆苦沒在其中·不覺不知·今日慚·愧誦持大乘·眞實法藏·歸向普賢菩薩·一切世尊·燒香散華·説身過罪·不敢覆藏·以是因縁·令我與法界衆生·身根重罪畢竟·清淨懺悔·已禮三寶
第二第三亦如是

至心懺悔．弟子某甲与一切法界衆生．從無始已来．意根不善·貪著諸法·狂愚不了隨所縁境·起貪瞋癡·如是邪念·能生一切惡業·所謂十惡五逆·猶如猿猴·亦如黐膠·處處貪諸·遍至一切·六情根中·此六根業·枝條華葉·悉滿三界·二十五有·一切生處·亦能増長·無明生死·十二苦事·八邪八難·無不經中·無量無邊·惡不善報·從意根生·如是意根·即是一切·生死根本·衆苦之源·如經中説·釋迦牟尼·名毘盧遮那·遍一切處·當知一切諸法·悉是佛法·妄想分別·受諸熱惱·是則於菩提中·見不清淨·於解脱中·而起纏縛·今始覺悟·生重慚愧·生重怖畏·誦持大乘·如説修行·歸向普賢菩薩·一切世尊·燒香散華·説意過罪·發露懺悔·不敢覆藏·以是因縁令我與法界衆生·意根一切重罪·乃至六根所起·一切惡業·已起今起·未來應起畢竟·清淨懺悔·已禮三寶　第二第三亦如是

○次四悔

勧請　我弟子某至心勧請　十方応化法界無量仏．唯願久住転法輪．含霊抱識還本浄然後如来帰常住勧請已礼三宝．

随喜　我弟子某至心随喜　諸仏菩薩諸功徳．凡夫静乱有相善．漏与無漏一切善．弟子至心皆随喜．随喜已礼三宝．

廻向　我弟子某至心廻向　三業所修一切善．供養十方恒沙仏．虚空法界．盡未来．願廻此福求仏道廻向已礼三宝．

発願　我弟子某至心発願　願臨命終神不乱．正念往生安楽国．面奉弥陀値衆聖．修行十地證常楽．発願已礼三宝．

○次十方念仏

南無十方佛　南無十方法　南無十方僧　南無釋迦牟尼佛　南無多寶佛　南無十方分身　釋迦牟尼佛　南無妙法蓮華經

南無文殊師利菩薩　南無普賢菩薩

○次経段　【『妙法蓮華経』安楽行品】

○次十方念仏

南無十方佛　南無十方法　南無十方僧　南無釋迦牟尼佛　南無多寶佛　南無十方分身　釋迦牟尼佛　南無妙法蓮華經

南無文殊師利菩薩　南無普賢菩薩

○次後唄

ところで，江戸時代に敬長が本山修験道派のために編んだ『本山修験勤行要集』（上下；1834 年）も，これら「法華懺法」（上）「例時作法」（下）とほぼ同様の次第であり，本山派修験道の朝夕勤行が，ほとんど天台宗の勤行と異ならなかったということがわかる．この次第集は，『日本大蔵経』所収のものによれば，次のような構成となっている．

晨朝勤行作法：伽陀　九條錫杖　法華懺法【総礼三宝　供養文　歎仏咒願　敬礼段　六根段　四悔　十方念仏】 安楽行品　後唄　三礼　七仏通戒偈　後夜偈　日中偈　黄昏偈　初夜偈　半夜偈　十如是　自我偈　釈迦讃　尊勝陀羅尼　諸真言　円頓章　舎利礼文　祈願　回向　等　附・祖師壇法楽

黄昏勤行作法：伽陀　例示作法　三自帰　七仏通戒偈　黄昏偈　無常偈　六為　四奉請　甲念仏　阿弥陀経　甲念仏　後唄　三礼　七仏通戒偈　初夜偈　九声念仏　三條錫杖（八十華厳）　十如是自我偈　阿弥陀讃　諸真言　宝篋印

陀羅尼　光明真言　不動慈救咒　一字金輪咒　円頓章　本覚讃　祈念　廻向　祖師鎮守霊壇　（附・如意輪讃）

ここでは，朝に『佛頂尊勝陀羅尼』，夕に『宝篋印陀羅尼』の読誦が課せられていることに注目したい．ちなみに本山修験道派の関連では，千日回峰行を21歳で発願し，31歳にして満行した大行満願海（1823 － 1873）の存在が広く知られ，願海は『佛頂尊勝陀羅尼』の普及活動で著名であるが，彼は敬長の弟子である園城寺法明院の恭堂敬彦（1806 － 1860）の弟子筋に当たり，ここに敬光－敬長―敬彦―願海の法統を確認することができる．『佛頂尊勝陀羅尼』の奉持についても，この伝承の中で考えることができるだろう．

この伝承は慈雲尊者にも関わる．先に『観智儀軌』で掲げたテキストのうち，21）「誦普賢行願」で引いた「右膝著地．合掌當心閉目專意．誦普賢行願一遍．一心遍縁諸佛菩薩．應定心思惟普賢行願一一句義．發大歡喜難遭之想」の部分は，慈雲著『普賢行願讃梵本釈草本』末尾（全集九上552頁；1767年撰）において「瑜伽観智軌曰」の後に引かれている．この著作写本は，元来栂尾高山寺（もと明恵1173 － 1232ゆかりの華厳宗寺院）の慧友（天保年間1830 ～ 43に高山寺を復興した律師）に対し，1802年慈雲が賜り，これが1857年願海に渡ったものであるが，願海はこれを受け取った際「忽遇大王膳打歌踏舞歓喜歓喜」し，以降「家珍第一者也」としたという[23]．上の書き込みは，おそらく願海によるものと思われ，願海が『観智儀軌』にも通暁していたことをうかがわせる．願海は上述したように，千日回峰行満行を記念して，1853年京に佛頂尊勝陀羅尼碑を建立しているが，その梵字部を記したのは「魚山普賢院前主」の宗渕（1786 － 1859）である．宗渕が普賢院に住していたのは1818年から1823年にかけてであるが，改めてこの称号を用いていることが注目される．

もちろん，本稿で参照した「台宗課誦」にもこれら二つの陀羅尼は掲載されている．だがこれを自編の修験道勤行集に収めたのは，敬長が，円珍以来密教すなわち台密への傾斜を見せる寺門派（三井寺派）の僧であったこととも併せ，おそらくは敬光を経ての慈雲の間接的な影響を受けていたためだと考えることも可能であろう．その影響は，敬彦を経て願海にまで及んでいるのである．

Ⅴ　「普賢行願讃」

では次に，『観智儀軌』の中で「法華三昧」とともに言及が行われていた「普

賢行願」について考えることにしよう．この「普賢行願」に関しては，これを「五悔」であるとする解釈も見られるが，「普賢行願讃」（すなわち大正 no. 297）であると解するのが正しいとされる[24]．ところで，慈雲自身が中興した高貴寺での朝夕勤行の次第は，『慈雲尊者全集』第 6 巻の末尾に「三時勤行法則」として収められている．これは，慈雲ら神下山高貴寺の正法律一派が日々拠った勤行の次第であり，朝・日中・暮の 3 時に礼佛勤行する法則として，「河内高貴寺一派は今もこの法則により勤行する」と付記され，以下のような内容を持つ．

朝：三礼　歎佛　坐禅　梵本普賢行願讃　宝篋印陀羅尼　上座呪願文　諸霊回向　総回向

日中：三礼　歎佛　四分律序　上座呪願文　過去帳回向　回向呪願　回向文　三礼　出堂

暮：三礼　歎佛　坐禅　梵網経（十重禁）　尊勝陀羅尼　上座呪願文　伝戒列名　総回向　三礼

このように慈雲の高貴寺・正法律一派では，「普賢行願讃」の梵本での読誦が特徴的である．そこで次にこの「普賢行願讃」の内容を検討することにしよう．この頌は普賢菩薩の修行を模範として讃美するもので，仏陀を讃え，礼拝供養し，自らの罪を懺悔し，あらゆる生き物の美徳を褒め，仏陀の説法を請い，永く世に留まられるように願い，仏陀にならって努力し，あらゆる生き物に奉仕し，これらすべての善行の功徳をあらゆる生き物に振り向け，すべてのものが安楽であり，仏陀の最高理想に到達することを願望し，これを実践することを誓うものである[25]．元来『華厳経』の一部として構想されたものと思われ，訳文としては，不空訳『普賢菩薩行願讃』の他に，般若三蔵訳『四十華厳』，および仏馱跋陀羅（359 － 429）訳『文殊師利発願経』がほぼ同じ内容を伝えている．仏教諸宗派の日常勤行に広く取り入れられている「懺悔文」（我昔所造諸悪業　皆由無始貪瞋痴　従身語意之所生　一切我今皆懺悔；第 8 頌，第 29 － 32 句）は般若訳によったものである．

まず，本学にも慈雲シューレによる写本（ハ 320 － 49）が伝わる慈雲の『普賢行願讃的示』（1767/68 年ごろ）より，その冒頭部の注記を参照してみよう[26]．

> 此六十二頌．今且為六段而解．配之十大願．初段十二頌．初二三礼敬諸佛．第四称讃如来．第五六広修供養．第七結上．第八懺除業障．第九随喜功徳．第十請転法輪．第十一請佛住世．第十二普皆回向．其常随仏学恒順衆生二願並在下具示之．

一方，第十三頌の冒頭には，

已下第二（ノ）十頌．初二三常随仏学．四五六恒順衆生．七八亦常随．九十恒順．

とあり，このような慈雲の内容区分は，現在残されている彼の「普賢行願讃」関連の著書，たとえば前節に引いた 1767 年撰の『普賢行願讃梵本釈』にもほぼ同様の形で付せられている．いまそれらを付し，全文を不空による漢訳とともに提示してみよう．

『普賢菩薩行願讃』

礼敬諸仏　所有十方世界中　一切三世人獅子　我今礼彼尽無余　皆以清浄身口意

身如刹土微塵数　一切如来我悉礼　皆以心意対諸仏　以此普賢行願力

於一塵端如塵仏　諸仏仏子坐其中　如是法界尽無余　我信諸仏悉充満

称讃如来　於彼無尽功徳海　以諸音声功徳海　闡揚如來功徳時　我常讃歎諸善逝

廣修供養　以勝花鬘及塗香　及以伎樂勝傘蓋　一切嚴具皆殊勝　我悉供養諸如來

以勝衣服及諸香　末香積聚如須彌　殊勝燈明及燒香　我悉供養諸如來

所有無上廣大供　我悉勝解諸如來　以普賢行勝解力　我禮供養諸如來

懺除業障　我曾所作衆罪業　皆由貪欲瞋恚癡　由身口意亦如是　我皆陳説於一切

随喜功徳　所有十方群生福　有學無學辟支佛　及諸佛子諸如來　我皆隨喜咸一切

請転法輪　所有十方世間燈　以證菩提得無染　我今勸請諸世尊　轉於無上妙法輪

請仏在世　所有欲現涅槃者　我皆於彼合掌請　唯願久住刹塵劫　爲諸群生利安樂

普皆回向　禮拜供養及陳罪　隨喜功徳及勸請　我所積集諸功徳　悉皆迴向於菩提

常随仏学　於諸如來我修學　圓滿普賢行願時　願我供養過去佛　所有現住十方世

所有未來速願成　意願圓滿證菩提　所有十方諸刹土　願皆廣大咸清淨

諸佛咸詣覺樹王　諸佛子等皆充滿　所有十方諸衆生　願皆安樂無衆患
恒順衆生　一切群生獲法利　願得隨順如意心　我當菩提修行時　於諸趣中憶宿命
若諸生中爲生滅　我皆常當爲出家　戒行無垢恒清淨　常行無缺無孔隙
天語龍語夜叉語　鳩槃荼語及人語　所有一切群生語　皆以諸音而説法
常随仏学　妙波羅蜜常加行　不於菩提心生迷　所有衆罪及障礙　悉皆滅盡無有餘
於業煩惱及魔境　世間道中得解脱　猶如蓮華不著水　亦如日月不著空
恒順衆生　諸惡趣苦願寂靜　一切群生令安樂　於諸群生行利益　乃至十方諸刹土
常行隨順諸衆生　菩提妙行令圓滿　普賢行願我修習　我於未來劫修行

恒順衆生　所有共我同行者　共彼常得咸聚會　於身口業及意業　同一行願而修習
所有善友益我者　爲我示現普賢行　共彼常得而聚會　於彼皆得無厭心
供養　常得面見諸如來　與諸佛子共圍繞　於彼皆興廣供養　皆於未來劫無倦
護法随学　常持諸佛微妙法　皆令光顯菩提行　咸皆清淨普賢行　皆於未來劫修行
於諸有中流轉時　福德智慧得無盡　般若方便定解脱　獲得無盡功德藏
見仏　如一塵端如塵刹　彼中佛刹不思議　佛及佛子坐其中　常見菩提勝妙行
如是無量一切方　於一毛端三世量　佛海及與刹土海　我入修行諸劫海
【遍入音声之偈】　於一音聲功德海　一切如來清淨聲　一切群生意樂音　常皆得入佛辯才
於彼無盡音聲中　一切三世諸如來　當轉理趣妙輪時　以我慧力普能入
以一刹那諸未來　我入未來一切劫　三世所有無量劫　刹那能入俱胝劫

常随仏学　所有三世人師子　以一刹那我咸見　於彼境界常得入　如幻解脱行威力
荘厳浄土　所有三世妙嚴刹　能現出生一塵端　如是無盡諸方所　能入諸佛嚴刹土
親近諸仏　所有未來世間燈　彼皆覺悟轉法輪　示現涅槃究竟寂　我皆往詣於

世尊

以神足力普迅疾　以乘威力普遍門　以行威力等功德　以慈威力普遍行
以福威力普端嚴　以智威力無著行　般若方便等持力　菩提威力皆積集
皆於業力而清淨　我今摧滅煩惱力　悉能降伏魔羅力　圓滿普賢一切力
普令清淨刹土海　普能解脱衆生海　悉能觀察諸法海　及以得源於智海
普令行海咸清淨　又令願海咸圓滿　諸佛海會咸供養　普賢行劫無疲倦

随学　所有三世諸如來　菩提行願衆差別　願我圓滿悉無餘　以普賢行悟菩提
諸佛如來有長子　彼名號曰普賢尊　皆以彼慧同妙行　迴向一切諸善根

常随仏学　身口意業願清淨　諸行清淨刹土淨　如彼智慧普賢名　願我於今盡同彼
普賢行願普端嚴　我行曼殊室利行　於諸未來劫無倦　一切圓滿作無餘
所須勝行無能量　所有功德不可量　無量修行而住已　盡知一切彼神通

通述　乃至虚空得究竟　衆生無餘究竟然　及業煩惱乃至盡　乃至我願亦皆盡

大願供養　若有十方無邊刹　以寶莊嚴施諸佛　天妙人民勝安樂　如刹微塵劫捨施

福生　若人於此勝願王　一聞能生勝解心　於勝菩提求渴仰　獲得殊勝前福聚

破悪趣見仏　彼得遠離諸惡趣　彼皆遠離諸惡友　速疾得見無量壽　唯憶普賢勝行願
得大利益勝壽命　善來爲此人生命　如彼普賢大菩薩　彼人不久當獲得
所作罪業五無間　由無智慧而所作　彼誦普賢行願時　速疾鎖滅得無餘
智慧容色及相好　族姓品類得成就　於魔外道得難摧　常於三界得供養
速疾往詣菩提樹　到彼坐已利有情　覺悟菩提轉法輪　摧伏魔羅并營從
若有持此普賢願　讀誦受持及演説　如來具知得果報　得勝菩提勿生疑

総結回向　如妙吉祥勇猛智　亦如普賢如是智　我當習學於彼時　一切善根悉迴向
一切三世諸如來　以此迴向殊勝願　我皆一切諸善根　悉已迴向普賢行
當於臨終捨壽時　一切業障皆得轉　親覩得見無量光　速往彼刹極樂界
得到於彼此勝願　悉皆現前得具足　我當圓滿皆無餘　衆生利益於世間
於彼佛會甚端嚴　生於殊勝蓮花中　於彼獲得受記別　親對無量光如來
於彼獲得受記已　變化俱胝無量種　廣作有情諸利樂　十方世界以慧力
若人誦持普賢願　所有善根而積集　以一刹那得如願　以此群生獲勝願

我獲得此普賢行　殊勝無量福徳聚　所有群生溺悪習　皆往無量光佛宮

初めの十二頌に関する見出しは，順に①「礼敬諸仏」②「称讃如来」③「廣修供養」④「懺除業障」⑤「随喜功徳」⑥「請転法輪」⑦「請仏在世」⑧「普皆回向」となり，①は身浄，②は口浄，③は意浄を表し，また①②③は「至心帰命」，④は「至心懺悔」，⑤は「至心随喜」，⑥⑦は「至心勧請」，⑧は「至心廻向」に当たるとされ，これら「至心帰命　至心懺悔　至心随喜　至心勧請　至心廻向」は，後に見る真言宗法会での「五悔」の見出しと等しくなる．また，次の十頌に冠されている「常随仏学」および「恒順衆生」を，上掲の⑧「普皆回向」の前に組み込んで全体を 10 部立てとする理解もある．慈雲はこの「普賢行願讃」を，正法律一派の毎日の朝課で梵本に拠って唱えていた．そこには，梵語による観想を通じての「正法」の復興と同時に，懺悔を基盤とした律の護持を目指した彼の基本精神が如実に表れている．

ところで，最初に普賢行願と五悔の関係について述べているのは，台密の安然 (841 － 915) による『金剛界対受記』であり，「珍和上説．此五悔亦普賢行願」とされている．即ち安然によれば，すでに智証大師円珍（814 － 891）が五悔＝普賢行願との理解を示していたということになり[27]，また『観智儀軌』における普賢行願も，五悔のことを指すとする解釈がある．もっとも既に述べたように，この「普賢行願」は「普賢行願讃」を指すと受け取るのが正しいとされる．

慈雲が高貴寺勤行法則に「普賢行願讃」を取り入れているのも，『観智儀軌』の「普賢行願」（すなわち「普賢行願讃」）を採用したものと理解できるだろう．慈雲は『法華陀羅尼諸訳互証』（本学所蔵，ハ 320 － 58）などを手がけるなかで，六陀羅尼の梵本を載せる『観智儀軌』の存在を知悉しており，最晩年になって，自らの「普賢行願讃」重視の方針と，天台への展開可能性などを勘案し，改めて『観智儀軌』の骨格を成す六陀羅尼すなわち「六番神咒」を取り上げたものと考えられよう．そこには，既成の宗派に偏ることなく，原典に回帰しつつ本質を奉持しようとする慈雲の基本理念が顕著である．

Ⅵ　慈雲尊者・高貴寺開山忌法要

ところで『観智儀軌』のような行法は，現在では寺院内部における僧侶の個人的な意向での執行以外には，一般に執り行われることはまずないようである[28]．では，現行の実際の法会ではどのような次第が行われているのであろう

か．筆者は 2011 年秋から 2012 年初夏にかけて，3 度にわたり仏教法要に与かる機会を得た．最初は 2011 年 10 月 21 日，河内野中寺での「弘法大師御膳供養会」であり，2 つ目はその翌日，2011 年 10 月 22 日における河内高貴寺での「慈雲尊者開山忌法要」であり，そして 3 つめは，2012 年 5 月 13 日における河内野中寺での「光明真言会」である．これら野中寺および高貴寺は，いずれも河内国における名刹であり，また慈雲尊者ゆかりの寺院としても共通性を持つ．実際，本学で 2010 年 10 月に附属図書館秋季特別展示会「慈雲尊者と悉曇学」を開催した際, 野中寺の野口眞戒和上および高貴寺の前田弘隆和上は, 遠路をはるばるご来駕くださった[29]．このたび，門外漢の筆者に対し，寺院法要に与かる機会を快く与えて頂いたことに，まず感謝申し上げる．これらのうち，本稿では 2011 年 10 月 22 日，河内高貴寺において執り行われた「慈雲尊者開山忌法要」の次第を取り上げたい[30]．これは声明を伴い，河内の関係諸寺の僧侶を招いて荘厳に行われたものであり，法会の実際に照らして必要な注記は，※とともに適宜付記してある．

1．総礼伽陀：

～三世十方の諸仏に対し，総じて礼する伽陀である．導師はこの間に，三礼，着座普礼，塗香，三密観　乃至　被甲　を執り行っている．

我此道場如帝珠　十方三宝影現中　我身影現三宝前　頭面接足帰命礼

1．傳供【云何唄】

～法会の最初に四智梵語・大日讃・本尊讃の三讃を唱えながら本尊聖衆に供養物を捧げる行為を指す．導師は傳供の間に，加持香水，加持供物，覧字観，浄地，観仏　金剛起　等を執り行っている．

云何得長　金剛不壊身　復以何因縁　得大堅固力

1．散華

～諸仏を供養するために花を散布する行為.

願我在道場　香花供養仏　帰命毘盧舎那　仏身口意業　遍虚空演説如来三密門　金剛一乗甚深教香花供養仏

願以此功徳　普及於一切　我等与衆生　皆共成仏道　香花供養仏

1．對揚：

～対告衆が如来の徳を称揚する義によってこう名づけられる．散華の儀式を終え，引き続き教主に帰命し仏法世法の常住安穏を祈る偈文を用いる．

南無法界道場　三密教主舎那尊　四方四仏　証誠加持　慈雲尊者　倍増法楽

不空羂索　薫入土砂　所願成弁　金剛手菩薩

1．唱礼 ＋ 五悔：

～この五悔に関して,『密教大辞典』によれば,真言宗では「ゴカイ」と読み,至心帰命　至心懺悔　至心随喜　至心勧請　至心廻向を指すのに対し，天台では「ゴゲ」と読み，懺悔　勧請　随喜　廻向　発願　を指すが，両者は次第を異にするのみであるという．五悔は『金剛頂蓮華部心念誦儀軌』(『大正大蔵経』第 18 巻 no. 873，300 頁上ー中）に説かれている．この『心念誦儀軌』は，金剛界法の根本儀軌であり，本朝において製作された金剛界念誦次第はすべてこれを所依とする．また「五悔」が唱曲でもって誦される場合,「唱礼」と呼ばれる．

いま真言宗の理解を記すならば，至心帰命とは三業を清浄にして慇懃に三宝を敬礼し帰命する義，至心懺悔とは至心に過去世に造った罪業を懺悔する義，至心随喜とは深く歓喜心を発して，仏菩薩二乗等一切有情の集合せる福智の善根功徳を至心に随喜する義，至心勧請とは，現在十方の一切諸佛に久しく世に住して悲願を捨てず，永く法輪を転じて衆生を利益し救済したまえと至心に勧請する義，至心廻向とは上の四功徳を失わず，菩提心を退堕せしめず，常に諸佛に随って学び，常に勝族に生まれて衆生を利益し，四弁・六通・十自在・諸禅等の功徳を得て，これを遍く皆，無上菩提に廻向する義を明かす義である，とされる [31].

まず，一切恭敬敬礼常住三宝　と唱えられ，そのあとに陀羅尼が続く．音を写すなら [32],

おんそははんばしゅださらばたらま　そははんばしゅどかん　Oṃ svabhāva-śuddhāḥ sarva-dharmāḥ svabhāva-śuddho ’ham.

これは浄三業真言で,「オーン，一切諸法自性清浄なり．されば我は自性清浄なり」の意である．

おんさらばたたぎゃた　はなまなのうきゃろみ　Oṃ sarva-tathāgata-pāda-vandanaṃ karomi.

これは普礼真言で,「オーン，一切諸如来の御足に稽首たてまつる」の意である．これら二真言は「十八道行法」の冒頭に位置する「荘厳行者法」から「浄三業」と「普礼」の部分の真言を採ったものである [33] (「十八道」にあっては，両者の順序は逆転する)．これらに続き,

帰命十方一切仏　最勝妙法菩提衆　以身口意清浄業　慇懃合掌恭敬礼　帰命

【頂礼大（悲盧舎那仏)】 ※【】内は略す，以下同様.

無始輪廻諸有中　身口意業所生罪　如仏菩薩所懺悔　我今陳懺亦如是　帰命

我今深発歓喜心　随喜一切福智聚　諸仏菩薩行願中　金剛三業所生福　縁覚声聞及有情　所集善根盡随喜　帰命

一切世燈座道場　覚眼開敷照三有　我今胡（※あしへんを伴う）跪先勧請転於無上妙法輪　所有如来三界生　臨般無余涅槃者　我皆勧請令久住　不捨悲願救世間　帰命

懺悔随喜勧請福　願我不失菩提心　諸仏菩薩妙衆中　常為善友不厭捨　離於八難生無難　宿命住智荘厳身　遠離愚迷具悲智　悉能満足波羅密　富楽豊穣生勝族　眷属広多恒熾盛　四無礙弁十在　六道諸禅悉円満　如金剛幢及普賢　願讃廻向亦如是　帰命頂礼大悲盧舎那仏

と唱えられ，以下，真言等が続く.

唵冒地　質多　　唵三摩耶　薩怛鑁　　帰命摩訶　毘盧舎那仏　　四方　四智四波羅密　　十六八供　四摂智

教令　輪者降三世　　両部界　会諸如来　　外金剛　部威徳天　　不越　本誓三昧耶　　降臨　壇場受妙供

弘法　大師増法楽　　開山　　神変　　三国　伝灯諸阿闍梨　　護持　法主・大衆・施主　除不祥　　滅罪　生善成大願

天下　法界同利益　　衆生　無辺誓願度　　福智　無辺誓願集　　法門　無辺誓願学　　如来　無辺誓願事　　菩提無上誓願證

次いで,

1. 前讃：　～法会の主眼とする法儀，すなわち読経の前に唱える讃．以下○の３つを「三讃」という.

○四智梵語　Oṃ vajrasattva saṃgrahā vajra ratnam anuttaram vajradharma gāyanāiḥ vajrakarma karobhava.

～大円鏡智・平等性智・妙観察智・成所作智の四智の徳を挙げ，金剛界の大日尊を讃賞する偈頌である.

○心略梵語＝胎 蔵 大 日 讃　Sarva vyabhibhava grāgriya sugata-adhipate jina trāidhātuka-mahārāja vāirocana-nomo’stu te.

～大日如来の功徳を讃嘆する偈頌．胎蔵大日の讃である.

○不動梵語　Namaḥ sarva-buddha-bodhi-sattvānāṃ sarvatra saṃkusumita abhijñārājñe namo’ stute svāhā.

～不動明王の功徳を讃嘆する偈頌である.

1. 普供養　Oṃ amogha-pūja maṇi-padma-vajre tathāgata-vilokite samantaṃ prasara hūṃ.

～「オーン，不空なる供養よ．宝珠と蓮華と金剛の（徳性ある）如来の観見において普く顕現せよ．フーン」の意.

1. 三力偈：～行者の功徳力と如来の加持力と，法界力と三力相応して普く供養を成就することを説く偈.

以我功徳力，如来加持力，及以法界力，普供養而住

1. 理趣経【読経部】

後鈴に続けて,

1. 後讃：　～法会の主眼とする法儀の後に唱える讃.

四智漢語　金剛薩埵摂受故，得為無上金剛宝，金剛言詞歌詠故，願成金剛勝事業

心略漢語　一切善生種 妙用体無礙 三界如大王 遍照我頂礼

光明真言秘讃　Oṃ amogha-vairocana mahāmudra maṇi-padma-jvala pravartaya hūṃ.

～「おんあぼきゃべいろしゃのう　まかぼだらまにはんどま　じんばらはらばりたや　うん」として広く知られる.

「オーン. 不空遍照尊よ. 大印者よ. 摩尼と蓮華との光明を汝は展転せしめよ. フーン」の意.

1. 普供養　Oṃ amogha-pūja maṇi-padma-vajre tathāgata-vilokite samantaṃ prasara hūṃ.

「オーン，不空なる供養よ．宝珠と蓮華と金剛の（徳性ある）如来の観見において普く顕現せよ．フーン」の意.

1. 三力偈　以我功徳力，如来加持力，及以法界力，普供養而住.

1. 祈願　普供養摩訶　普供養両部　諸尊護法　所説哀愍　護持無辺決定　天下平等

1. 礼仏　南無摩訶　南無阿閦　南無宝生　南無無量　南無不空　南無四波羅　南無十六　南無八供養　南無四摂　南無金剛界

南無大悲胎蔵界一切

1. 光明真言（※上掲）

1. 舎利礼

一心頂礼

1. 廻向伽陀

「光明真言願は善巧方便廻して生死の夢を驚かし，大覚尊と成し給え」に続き，

聖霊決定生極楽　上品蓮華成正覚　菩提行願不退転　引導三有及法界　願以此功徳　普及於一切　我等与衆生　皆共成仏道

1. 称名礼

南無光明真言（教理行果）　南無慈雲尊者（倍増法楽）　南無自他法界（平等利益）

以上のような次第の概括より判明するように，前讃と後讃の間に読経をはさんで法会が執り行われるのが常であり，前讃の前に「五悔」が置かれる．天台宗と真言宗とを比較した場合，真言宗の「五悔」に当たるものは，天台宗で「四悔」とされるものと，その前に拡充して加えられた「六根段」と呼ばれるものとを併せたものだと言える．これは「法華三昧」における「正修行方法」の第7が「懺悔」とされて六根段と四悔とを併せ含むという，原型を参照しての考察によっても明らかであろう．

Ⅶ　『金剛薩埵修行成就儀軌』と五悔

ところで慈雲は，1802年に撰した『金剛薩埵修行成就儀軌私記』において，『大正大蔵経』no.1119に載る不空訳「大楽金剛薩埵修行成就儀軌」（「大楽軌」）に注記を加えながら，実際の儀軌としては「大楽軌」テキストから離れ，その前行に当たるものとして「五悔」を取り込んでいる．すなわち，『大蔵経』に載る「大楽軌」のテキストでは，序文に続き，五相成身観をはさんで直ちに金剛合掌・金剛縛へと進む．しかしながら慈雲は，序文のあと金剛界曼荼羅の義を説いた後に五相成身観に移り，その末尾を構成する心真言の後，「五悔」をはさんでから金剛合掌・金剛縛へと移る．すなわち慈雲は，冒頭の心真言に続いて

又観khaṃ字安於頂上．白色放大光明．遍照十方一切世界．思其字実相義．所謂一切法等同虚空．離諸色相離諸障礙．則於真実理中．現無量諸仏身．猶如恒沙．具諸相好皆入法界定．則誦遍照明歴然瞻仰尊容．真言曰khaṃ vajradhātu.（三世虚空　金剛界）．

次結金剛起印．以前二拳．鉤壇慧．進力側相拄．三拳如鉤勢．誦真言驚覚諸

仏．一拳一誦．当作此思惟．諸仏不貪寂静味．悉従定起赴集会．観察於我同摂受．我亦住聖衆前．礼事供養．真言曰 oṃ vajra tiṣṭha hūṃ（金剛起真言）

とした後，この最後の金剛起真言のあと，

即身心不動揺．定中礼諸仏．応誦普賢業願．而求最勝覚

に続けて，

帰命十方一切仏　最勝妙法菩提衆　以身口意清浄業　慇懃合掌恭敬礼　無始輪廻諸有中　身口意業所生罪　如仏菩薩所懺悔　我一陳懺亦如是　我今深発歓喜心　随喜一切福智聚　諸仏菩薩行願中　金剛三業所生福　縁覚声聞及有情　所集善根盡随喜　一切世燈座道場　覚眼開敷照三有　我今胡跪先勧請　転於無上妙法輪　所有如来三界生　臨般無余涅槃者　我皆勧請令久住　不捨悲願救世間　懺悔随喜勧請福　願我不失菩提心　諸仏菩薩妙衆中　常為善友不厭捨　離於八難生無難　宿命住智荘厳身　遠離愚迷具悲智　悉能満足波羅密　富楽豊穣生勝族　眷属広多恒熾盛　四無礙弁十在　六道諸禅悉円満　如金剛幢及普賢　願讃廻向亦如是

という「五悔」の文を唱えた後，金剛合掌印へと進むのである．こうして慈雲は，経法による特別な儀軌に際しても，その前段階に「五悔」を置いている．正法律における朝課での懺悔文としては，梵本により「普賢行願讃」が用いられたが，法会にも用いられる儀軌本文に対しては，簡略ながら「普賢行願讃」と同じ働きをなす「五悔」が取り込まれているのである．懺悔に関して怠ることのないよう努めた慈雲の姿が，ここから明らかとなるだろう．

結．基盤としての「五悔」

以上，本稿では『法華陀羅尼略解』をその核心に収める『観智儀軌』を手がかりに，その中に言及される「法華三昧」さらにはその縮約版と言いうる「法華懺法」の次第，同じく『観智儀軌』に言及があり慈雲の正法律一派の依経でもある「普賢行願讃」，さらには「五悔」を含む真言宗の法会次第などに関して，総合的に比較考察してきた．それらの聖教類は，細部において相違はあるものの，共通項としていずれも「五悔」の要素を含んでいることが明らかとなった．天台宗の場合に関しても，「六根段」を一つの「悔」と受け取るならば，四悔と併せて同質だといえる．類比的表現を用いるなら，『観智儀軌』には，天台系の「法華懺法」と真言系の「五悔」に当たるものとに対する指示・言及が併せ含まれていることになり，おそらく慈雲はこのような『観智儀軌』の総合性・

包括性に気づいた上で, 最晩年に, この儀軌の骨格を形成する『法華陀羅尼略解』の注疏を手がけたものと思われる．このような学識に裏づけられた慈雲の不偏性こそ，宗派を超えて慈雲の許に悉曇学徒の入門が相次いだ理由であろう．また慈雲の許に集った僧侶たちは，いずれも「律師」と呼ばれる人々であり，彼らを集わせた慈雲の聖教類には，律の中心となる「五悔」の精神性が色濃く留められていた．このように，『観智儀軌』の核心を成す「法華陀羅尼」は，慈雲以降の江戸期から明治初期にかけて，律・真言・天台そして修験道の僧たちに，大きな精神的刷新運動の基点としての位置を与え続けたのである．

注

1　本稿は，平成 24 － 26 年度科学研究費補助金（挑戦的萌芽研究）「慈雲著『法華陀羅尼略解』をめぐる文献学的ならびに密教史学的研究」による研究成果の一部である．関係各位の方々に，この場を借りて御礼申し上げる．

2　読み下しに際しては，現西来寺内司課・寺井良宣師よりご教示をいただいた．ここに深謝したい．

3　高野山出版社，2009 年，46 頁参照．

4　宗渕の筆頭弟子にして，西来寺第 32 世（重ねて第 34 世でもある）として宗渕を継いだ眞吽上人観海（　－ 1877）の手ではないと思われる．津市教育委員会編『真阿上人書簡 : 付真吽上人書簡』（平松楽斎文書 16，1992 年），巻頭写真参照．

5　以下，拙稿「慈雲尊者と戒律の系譜―筑波大学所蔵・慈雲自筆本『法華陀羅尼略解』を基に―」（『文藝言語研究　文藝篇』60, 1 － 26 頁，2011 年）の記述と重複する部分がある．

6　『日本大蔵経』法華部章疏第二部 531 － 542 頁所収，1917 年刊．

7　田久保周誉著・金山正好補筆『梵字・悉曇』（平河出版社，1981 年），139 頁参照．

8　板倉幸雄「敬光の学風―その求学的態度―」（『天台学報』16, 107 － 110 頁, 1974 年）．

9　前掲田久保著『梵字・悉曇』，139 頁．

10　以上，青木龍孝「妙有上人」（慈雲尊者の会刊行『雙龍』6，88 － 108 頁，1973 年）．

11　色井秀譲編『天台真盛宗　宗学汎論』（百華苑，1961 年），126 － 127 頁．

12　現筑西市黒子の巨刹・千妙寺については，拙稿「つくば・筑西の古刹を訪ねて　―千光寺と千妙寺―」（『つくばスチューデンツ』，平成 23 年度第 4 号，通巻 629 号 p.20, 2011 年 9 月），および渡辺荘仁『千妙寺』（筑波書林，1980 年）を参照．

13　以上，色井秀譲「西来寺と眞阿上人」（『天台学僧宗淵の研究』205 － 228 頁所収，眞阿宗淵上人鑽仰会編，百華苑，1958 年），214 － 215 頁．

14　色井秀譲『悉曇覚書』（天台真盛宗宗学寮刊，1981 年），12 － 13 頁．

15　『日本大蔵経』修験道章疏第二部 83 － 104 頁所収，1919 年刊．

16　三崎良周「成就妙法蓮華経王瑜伽観智儀軌について」（『東洋学術研究』14 － 6 号，17 － 47 頁所収，1975 年）．

17　『仏教学論文集：伊藤真城・田中順照両教授頌徳記念』（高野山大学仏教学研究室編，東方出版，1979 年），3 － 23 頁所収．

18　浅井円道『上古日本天台本門思想史』（平楽寺書店，1975 年），460 頁以下を参照.
19　なお以下，漢訳仏典からの引用に際しては，「大蔵経テキストデータベース」（SAT）を活用させていただいたが，時に自ら写した部分もあり，旧字・新字の別などには特に意を用いていない．また真言・陀羅尼部分に関してはアルファベット化したが，釈文は付さなかった．拙稿「呉音から西洋古典語へ　―第 1 部　印欧語文献としての弘法大師請来密教経典―」（『文藝言語研究　言語篇』61，1 － 81 頁，2012 年）に載る真言のうちに，共通するものがある.
20　前掲浅井書，457 頁.
21　多田孝正「五台山佛教と「例時作法」」（塩入良道先生追悼論文集刊行会編 『塩入良道先生追悼論文集：天台思想と東アジア文化の研究』573 － 586 頁所収，山喜房佛書林，1991 年），576 － 577 頁参照.
22　延暦寺学問所編，芝金声堂，1988 年刊.
23　『慈雲尊者全集』第九上，551 頁.
24　村上了海「五悔と九方便　―それらの類型との比較―」（『密教文化』133 号 16 － 34 頁所収，1981 年），18 頁.
25　渡辺照宏『お経の話』（岩波新書，1967 年），160 頁.
26　以下，『慈雲尊者全集』第九上，558，569 頁.
27　前掲村上論文参照.
28　なお上田霊城『真言密教事相概説―諸尊法･灌頂部（下）―』（同朋舎メディアプラン，1990 年），40 － 52 頁を参照.
29　このほか，同じく河内国平松寺の堀内和上も遠路展示会にご来駕くださった．あわせて謝意を表したい.
30　高貴寺発行・慈雲尊者二百回遠忌大法会『報恩院流　土砂加持法則』（2003 年）に基づく.
31　『密教大辞典』581 頁.
32　高野山専修学院監修・編輯『真言宗　常用経典』（珠数屋四郎兵衛，1992 年）を参照した.
33　十八道行法については，前掲拙稿「呉音から西洋古典語へ　―第 1 部―」を参照.